ＡＣＴⅣ　「OPERATION LAMDA」

　あたしの身体、おかしい、何がおかしいのかは分からないけど。でも、おかしいって思っている方がおかしいかもしれないわね。あたし、眠っている筈なのに･･･。
　なんか意識だけが身体を離れて、何もない空間に漂っている雰囲気。身体を動かそうとしているのに、指一本動かすことが出来ない。ふと下を見ると、この場合この言い方が正しいかどうかは分からないけれど、下の方に真っ白に光るあたしの身体が横たわっているのが見える。
　どぉなってんのぉ！
　叫んだつもりだけど全然声にならない。
「レイコ、レイコ･･･。」
　どこからかきれいな女の人の声が響いてきた。
「うぅ･･･、だ、誰？あたしを呼んでいるのは誰なの？」
　やっとの思いで喉の奥の方から声を絞り出した。
「あ、た、し、鈴子よ。もう一人のあなた。」
　たしかに･･･、あたしの前に現れたのはまるで鏡に映ったあたしを見ているかのようなそっくりさん。
「驚かないで･･･と言っても無理でしょうけど、これは夢なんかじゃないわよ。」
「夢じゃないって･･･、だったら何だっていうの？」
　信じろって言う方が無理なのよ。普通は自分が二人いるなんて思わないもん。こんな非現実的な体験をして、しかも寝ていると自覚しているんだから、どう頑張ってみたところで信じられる訳がない。
「ここはあたしが作り出した特殊空間なのよ。あなたとどうしても話したかったので、あなたの精神だけをここに呼んだの。突然でごめんなさいね。」
　ごめんなさいね･･･という言葉を聞いたのとほぼ同時くらいに、やっと身体が自由に動くようになったわ。ちょっと首を回して改めてよぉく見ると、くやしいけれどこちらの鈴子さんの方があたしより少し美人。
「もう知っていると思うけど、この惑星は現在戦いの真っ最中にあるの。でも、このままの状態が続いたら、この惑星は間違いなく消滅してしまうわ。」
「それで、あたしになんとかしてくれって言うんでしょ？」
「あら、よく知っているわね。」
「だって、ラオコーンにもまったく同じことを言われたもの。ねぇ、いったいみんなしてあたしに何をさせようっていうの？」
　あ、また思い出してきちゃった、あのいんちきコンピューター･･･。
「だいたいねぇ、コンピューターのくせして言いたいことだけ言って、都合の悪い質問をされると逃げちゃうっていうのはどういうことなのよ。ねぇ、あなたはちゃんと教えてくれるんでしょうね。」
　ちょっとこの鈴子さんを睨みつけるような感じになる。ここでまた逃げられたらという思いもあるし、今度こそ真実を聞きたいという思いもある。
「そうねぇ、早い話し、あなたにトリプタンを倒して欲しい訳なんだけど、あなた、まだ自分の能力に覚醒めてないみたいだし、覚醒めてくれれば全部話しちゃってもいいんだけどね。」
「能力って、何の能力？」
「何のって･･･、嫌だ、やっぱりまだ知らないの？誰も説明してくれなかった？」
　この鈴子さん、なんだか諦めたような表情を作って肩をすくめてみせる。
「あのねぇ、知らないなんてもんじゃないわよ。あたし、何も知らないのよ。それをみんなしてさ、トリプタンだか何だか知らないけどあたしに倒せっていうのは無謀ってもんじゃない？」
「そうかぁ、まだ早過ぎたんだ。まずいわねぇ、どうしようか･･･。」
　こう言うがあたしのことをジロジロ見ながら考え込んでしまった。
「ちょっとぉ、まさかあなたまで教えてくれないつもりじゃないでしょうね。」

「それなのよ、あなたが本当に何も知らないのだとすると、あたしが無闇に教えることって簡単にできないのよ。でも、それじゃあなたは納得してくれないでしょ？」
　あたし、大きく頷く。そんなの当たり前じゃないの。あたし一人だけ何も知らなくて、それなのに誰も教えてくれないんだもん。絶対にこのままじゃ納得出来る訳がない。
「でね、ちょっと考えたんだけど、あたし、あなたに切り札を渡すわ。」
「切り札？」
「そう、切り札。この後のあなたにとってきっと何かの役に立つ筈よ。」
　その綺麗な手であたしの手の中にキャッシュカードみたいな物を押し込んだ。
「それじゃあ。」
「ちょっと、まだ何も訊いていないのに。」
「大丈夫よ、あたしはもう一人のあなたでもあるのよ。あなたが必要と思う時にまた来るわ。」
　そう言ってニッコリ微笑む姿に思わず惹き込まれてしまう。自分の顔に似ているってのを抜きにしたってウットリするほどの素敵な表情。だけど、見惚れているほどの暇もなく、手を振る彼女の姿がゆっくりと薄れていく。それと同時にまた身体の自由が利かなくなってきて、周囲もドンドン暗くなっていく。
　待ってよぉ！
　そう叫んだ時にはあたしは完全に闇に包まれていた。そのまま意識もまた暗闇の中に落ちていく。
　･･･どのくらいの時間が経ったんだろ。目を覚ました時、頭がボーとしていて自分がどこにいるのか分からなくなっていた。
　見慣れない天井･･･。あ、そうか、ここはラオコーンだったっけ。無意識の内に腕時計を見ると１０時２２分を表示している。ということは･･･、嫌だ、１３時間半も寝てたんだ。フェリアの約一日じゃないの。
　起きようかなと考えているところに、タイミングよくノックの音が聞こえてくる。
「レイコさん、起きましたか？」
「ん、起きているよぉ。どうぞぉ。」
　なんか制服みたいな物とトレイを持ってきたユウが入ってきた。トレイにはコーヒーカップが乗っている。
「おはようございます。よく眠れましたか？」
「うん、ちょっと寝過ぎたみたいだけどね。」
　あたしはちょっと肩をすくめてみせて、ユウの持ってきた制服を受取った。ユウが着ているのと同じで、どちらかというとバトルスーツという方がしっくりする。手を通してみると不思議なことにサイズはあたしの身体にピッタリ合っている。寝ている間にサイズを測った？
「ねぇ、作戦会議は？」
　コーヒーを一口飲んだ途端、急に頭がはっきりしてきて、昨日までのことをいっぺんに思い出した。
「えぇ、もうすぐ始めます。たぶん全員オペレーションルームに集まっている頃だと思いますよ。」
「えーっ、んじゃ、急がなきゃ悪いじゃないの。」
「大丈夫ですよ、そんなに慌てなくても。どうせレイコさんが行かなければ始まりませんから。」
「そういうのって好きじゃないんだよね。それに初めて会う人もいる訳でしょ。待たしてるなんて申し訳ないもん。早く行こ。」
　飲みかけのコーヒーもそのままにユウを急かすようにあたしは立ち上がった。ユウはクスッと笑うと、急かすあたしに小さく頷いた。
　ユウに一緒にオペレーションルームへ入っていくと、もう既に全員が席に就いていて、案の定あたしは一斉に注目を浴びてしまった。あたしはちょっとユウの後ろに隠れるようにして、それからユウの示した席に腰を降ろした。
　それを見届けると、部屋の一番奥に座っていたアトリーが立ち上がった。

「さぁて、これで全員揃ったな。いまユウと一緒に入ってきた彼女は森柄鈴子さん、三Ｂ次元からやってきた地球人だ。暫くこっちで預かることにしたから、みんないろいろと教えてやってくれよ。」
「あ、森柄鈴子と言います。よろしく。」
　アトリーに促されて、慌てて自己紹介をした。いきなりということもあって気の利いた挨拶もできやしなかったけど、まぁいいか･･･。
　すると、あたしの右側に座っていた男の子が、ついっと立ち上がって大声を話し始めた。
「おまえかぁ、あの鬼のサーミンを怒らせって奴は。」
「そうよ、あたしよ。あのサーミンを怒らせたのは。」
　大人しくしていようと、ううん、少なくともこの場は控えめでいようと思ってたんだけど、つい言い方にカチンと来て、あたしも大声で言い返してしまった。言ってから、反射的にまずいと思ったけどもう遅い。みんなの視線があたしに集中しているのが分かる。
　その中でも一番強い視線、それがこの男の子の視線だった。ずーっとあたしのことを睨み付けていたけど、すぐにニヤッと笑ってあたしの前に右手を突き出した。
「ふんっ、気に入ったぜ。俺ぁ、ユーリってんだ。とりあえず歓迎するぜ。」
「ありがと。」
　こっちもこれ以上は騒ぎを大きくしたくないし、一応飛びきりの笑顔でユーリの右手を握り返した。
「よぉし、それじゃあ、そろそろ今回の作戦について説明させて貰うぞ。」
　アトリーの顔も急に険しくなる。たぶん、こっちがリーダとしてのアトリーの顔なんだろう。
「今回の計画はみんなも知っての通りラムダが持ってきたもので、つまりは初めて正式に俺たちに協力を求めてきた訳なんだが。今日はこの作戦を引き受けるか、それとも断るのか、それをここで決めたいと思う。まぁ、そうは言ったところで内容が分からなきゃ考えようもないだろうから、まずは計画の説明からしようか。ジン、ラムダ計画を説明してくれ。」
「はい。」
　アトリーの隣に座っていた緑髪の男の子がスーッと立ち上がって中央の大きなスクリーンの前に立った。アトリーはちょっと脇にどいて真ん中を空けてあげた感じ。
「では説明します。この計画は、最近フェリアに進出してきたジュール軍の前線基地を叩くことを目的としています。みんなも知っているように、この基地は守りという点では完璧なのでまともに攻めていったところで返り討ちにあう確率が非常に大きいと思われます。そこで囮作戦を使おうという考えです。それも二段構えのね。」
「囮って、まさか･･･。」
　ユーリが一瞬強張った表情を作って、意味あり気に笑ったジンくんを睨み付けた。どういう理由があるのかは分からないけど、えらく恐い顔。
「そう、そのまさかだよ。考えていたのは僕だけじゃなかったってことさ。」
　ジンくんがスイッチらしいものを押すとスクリーンに映像が映し出された。胸ポケットから伸び縮みするスティックを取り出して、スクリーンのある部分を指し示す。
「まず、この図を見て下さい。これが南フェリアに位置するジュール軍の前線基地。そして、その上空にあるステーション基地アリンⅡ。そして、それにもう一つ、ジュールの現在の首都であるトリプト。今回の攻撃目標はこの三箇所となります。最初に囮ＡがアリンⅡを攻撃します。そのほぼ同時刻に別の囮ＢがトリプトにＢ潜入します。つまり、この囮Ｂを本隊だと見せかける訳です。そこで手薄になる筈の前線基地を一気に潰す。･･･と、こんな具合です。」
　うーん、いまいちよく分からない、なんで、こんなややこしい計画を作るかなぁ。どうせ最終的にはトリプタンを倒したいんだったら、こんな面倒なことをしないで直接トリプタンと戦う訳にはいかないのかな。
「さぁて、これで一応の内容は分かってもらえたと思うが。ユーリ、どう思う？」
「俺ぁ、乗ったっていいぜ。奴にゃ借りがあるし、俺もあの小うるさい前線基地はなんとかしたかったんだ。」
「僕も賛成ですね。ラオコーンも成功率９５パーセントを出していますし、くやしいけど僕たちの計画よりもずっと確実です。」

「そうか･･･。」
　あたしはみんなが話し合っている間に、小声で左隣に座っているユウに話しかけた。
「ねぇ、あの二人は？」
「ユーリとジンですか？ユーリはこの基地の攻撃隊長なんです。それに超一流のエンジニアでもあって、この基地の武器はすべて彼が開発した物なんです。ジンの方はＩＱ２４０という頭脳の持ち主で、今のところラオコーンを扱えるのは彼しかいません。ですから作戦に関することはすべて彼がやっています。」
　はーん、なるほど見るからにそぉんな雰囲気。そうねぇ、彼らだったらあたしが地球に戻る方法も考えてくれるかもしれないわね。あとでそれとなく確かめてみるか。
「レイコちゃん、分かったか？」
　余計なことを考えていたもんだから、一瞬何をアトリーに訊かれたのか分からなかった。
「えっ、あ、ごめんなさい。」
「他人が説明している時にお喋りなんかしているからだよ。俺は話しが理解できたかって訊いたんだ。」
「あの、ちょっとぉ、頭が理解してくんなくて･･･。」
「まったく、ユウ、あとで説明してやってくれ。」
「はい。あ、でも、あの、あたしもよく分かっていない･･･。」
　アトリーったら右手を頭にやって大きな溜息をついた。まぁ、なんとなく気持ちは分かる気がする。
「いいですよ、僕があとで理解できるように説明し直しておきますから。」
「ごめんなさい。」
　ジンくんが助け舟を出してくれたんでとりあえず助かったけど、それにしてもただでさえ分からないのにお喋りはまずかったわね。
　あたしとユウは少ぉし小さくなって顔を赤くしていた。ユーリは呆れたって顔でこっちを見ている。
　そのユーリが不意に気が付いたように言い出した。
「でもよぉ、この計画を実行するにゃ、ちぃっとばかし頭数が足んなくねぇか？俺ぁ、どう見ても１２人くらいはいると思うんだがな。」
「そのことなら大丈夫、ちゃんと僕が確認してある。ここの他にゼウスが４名、それにラムダ本人とラムダが一人連れてくるって言っていたから全員で１１名になる。まぁ、それもうちが参加すればの話しですけどね。」
「ふーん、まぁ、そんなもんかなぁ。で、俺ぁ、何をすりゃいいんだ？」
「えーっと･･･、ん、ちょっと待った。」
　ジンくんが答えようとして瞬間、ビーッというブザー音が響いて壁のランプが点滅した。ユウはそれを見て慌ててコンソールに走っていくと、ヘッドセットを付けて誰かと交信を始めた。
「ゼウスからです。いまスクリーンにつなぎます。」
　ユウが言い終わらないうちに中央のスクリーンに尾田さんの顔のアップが映し出された。
「よぉ、アトリー、元気かい？」
「なんだ、珍しいな。ショウが自分でスクリーンの前に立つなんて。」
「いや、なに、レイちゃんのことも気になってさ。大丈夫かな？」
「まぁ、いや、大丈夫だよ、うん。」
　妙にニヤニヤした顔でそんな風に言ったところで、あまり大丈夫そうに聞こえないじゃない。他の人もみんなあたしのことを見て何か言いたげな表情を作っているし。スクリーンの中の尾田さんだけが、状況が分からず不思議そうな顔をしている。
「まぁな、どうせ、らしくないからね。ん、こんな世間話をするためにざわざわ連絡した訳じゃないんだ。」
　肩をすくめてみせた尾田さん、突然真面目な顔つきに戻った。
「さっきラムダから連絡がきてな、計画の決行は明日のイエローザルが出た時にしたいと、そう言ってきたんだ。で、そっちはどうなったかと思ってね。」

　アトリーはあたし達の方に一度振り返って確認するように頷くと、スクリーンの尾田さんに向かって言った。
「参加するよ、いい機会だからね。ただ、まだ会議中なんでね、細かいところまで話しが進んでいないんだ。詳細が決定し次第そっちに連絡するよ。」
「了解。じゃ、またあとで。」
　スーッと尾田さんの顔が消えて、スクリーンにはまた元の映像が映し出された。
「えーっと、決行時刻はみんなもいま聞いたとおり、明日のイエローザルが合図になります。それで分担なんですけど、アトリーと僕が囮ＡになってスラッグでアリンⅡに行きます。ユーリとジェニーはアルテミスで前線基地の上空で待機、ゼウスの指示に従って下さい。ユウはレイコさんと一緒にここに残って連絡係。途中、ラムダからの作戦変更が出たら、ユウから全員に指示を出して下さい。以上ですが、何か質問はありますか？」
「他のステーションの動きは誰が見るんだ？作戦中に気がつかれちまったら、もろに挟み撃ちにあうじゃねぇか。」
「それは、アリンⅠをポルが、アリンⅢはモータルがモニターするから大丈夫ですよ。」
「あんな無愛想なロボットに任せて大丈夫かよ。」
「ユーリ、きみのロボット嫌いは知っているけど、ポルとモータルはゼウスの端末なんだ。心配は要らないって。」
「はいはい、それくらい分かってらぁ。」
　ユーリは拗ねるようにわざと足を机に投げ出すと、それまで手で弄んでいた帽子を目深にかぶった。
　ジンくんがクスッと笑って自分の席に戻ると、それまで脇にどいていたアトリーがゆっくりとした動作で、また中央のスクリーンの前に立った。
「他に何か意見は無いか？無いのなら時間まで各自待機していること。じゃあ、解散。あ、それから、レイコちゃんは残っててくれ。」
　みんなはバラバラとオペレーションルームから出て行く。ユウもいつのまにか出て行っちゃって、残っているのはあたしとアトリーだけになっていた。
　あたしがなんとなく軽く溜息をついていると、アトリーがスーッと音もなく近づいてきて、銃をあたしの前に置いた。どう見ても普通の銃には見えない。小型で面白い形をしている。
「こんな物は使いたくないと思うかもしれないけど、この惑星じゃ必要になることもあるからね。もしもの時のために持っていたほうがいい。」
　うーん、なんか先を越されたって感じ。銃なんて要らないって言おうと思ったのにぃ。でも、あんまりアトリーの顔が真剣だったんで断れる雰囲気じゃなくなっちゃって、仕方がなしに黙って腰のホルダーに納めた。
　あたしがホルダーに銃を納めたのを確認すると、急に元のアトリーの顔に戻って、傍にあった変な機械をいじくりだした。
「どう、少しはここに慣れた？」
「うん、まぁ、どうかなぁ。今は無理にでも慣れようとしているからね。でも、地球に帰ることを諦めた訳じゃないわよ。」
　やっぱぁい、我ながらひどい返答だと思う。どうもアトリーとこうして面と向かって話しをすると、優一さんと像がだぶっちゃって妙な感じになっちゃうんだよね。
「あ、べつにここが気に入らないって訳じゃないのよ。ただ、あまりにも地球にやり残してきたことが多いから、だからね、あの･･･。」
　フォローしようとすればするほど余計ひどくなっていくような気がする。まったく、情けないったらありゃしない。
「分かった、分かった。もう言わなくてもいいよ。これじゃ、まるで俺がレイコちゃんを苛めているみたいだよ。」
「えっ、そんな･･･。」
　少しホッとする。あたしの本当の気持ちには気づいていないみたい。まさか初恋の人に似ているんですなんて言えないもんね。

　ところがアトリーったら変な風に笑っていて、直感だけど何かを企んでるって気がついた。たぶん、銃を渡すというのは口実。何気なくアトリーから視線を外した瞬間、オペレーションルームに男性が入ってくるのが見えた。黒い肌に半透明の髪の毛、その黒と白の色調が不思議な雰囲気をかもし出している。ここの人じゃないことは確かだけど、その風貌から予想もできそうにない。
　入口でちょっと立ち止まってニヤッと笑って白い歯を見せると、ゆっくりとアトリーに近づいてきた。
「相変わらずだな、アトリー。久しぶり。」
　片手を上げて近づいてきたこの男性の顔を見てアトリーは露骨に驚いた表情を作った。どうやら、アトリーが期待していた人とは違う人だったらしい。そして、いきなり素っ頓狂な声を出した。
「その顔、その声、ハリー･･･。まさか、夢じゃないだろうな。」
「夢じゃないさ。ついでに言うと幽霊でもないぜ。足だってちゃんと２本付いているし。」
「ハリー･･･。」
　アトリーったらそのまま絶句してしまい、黙ってハリーっていう人の肩を抱いて涙を浮かべている。そういえば、行方不明になっている人がいるってユウが言ってたっけ。このハリーがその行方不明だった人なんだ。
　そこへちょうどお茶を持っているユウが部屋に入ってきた。
「レイコさん、お茶･･･、あっ！」
「ユウ、ただいま。」
「･･･。」
　ユウはそのままの姿勢で暫く硬直している。ただ黙ってハリーを見つめるだけ。
「なんだよ、このハンサムな顔を見忘れちゃったのかよ。」
「ハリー･･･。」
　ユウったら持っていたプレートを静かにテーブルの上に置くと、ゆっくりとハリーに近づいた。そして、スーッと右手を上げると、次の瞬間アッと思う間もなく思いっきりハリーの左頬を引っ叩いた。
　うぅ、すごぉく痛そうな音･･･。
「なによ、今ごろ帰ってきて、あたしがどれだけ心配したと思うの？何がハンサムな顔よ、あたしがハリーのことを忘れる訳がないでしょ。まったく、生きていたなら、なんで連絡してくれなかったのよ。本当に本当に心配したんだから、莫迦･･･。」
　そのままハリーの胸の中に泣き崩れた。さながら洋画のワンシーンのようにハリーはユウの身体を優しく抱きしめる。アトリーとあたしは、それを呆気に取られて黙って見ているだけ。誰も何も言わない。ただユウのすすり泣く声だけが聞こえている。
　ふと気が付くと、アトリーが目配せをしているので、あたしは黙って頷くと一緒に静かにオペレーションルームを出てきた。部屋の外に出てから、アトリーは大きく溜息をつくと、ようやく強張った表情に笑顔が戻ってきた。
「ねぇ、彼はユウの恋人なの？」
「うん、まぁね。幼なじみだとか、親同士が決めた許婚だとか言っていたけど、そんなもんに関係なく互いに好き合っているみたいだから、やっぱり恋人でいいんじゃないかな。」
「ふーん、で、バシッ･･･な訳？」
「そんなもんだろう？じゃなきゃ、ただ単に叩きたかっただけとか･･･。」
　その瞬間、閉めた筈のオペレーションルームのドアが開いて、中からユウが飛び出してきた。
「アトリー！あたしが聞いていないと思って勝手なことを言わないでください。なんであたしがハリーを叩きたいと思ってなきゃいけないんですか。」
「いや、その･･･、おーい、ハリー！」
　あはっ、ハリーに助けを求めたんだけど無視されちゃってんの。で、結局アトリーもユウに引っ叩かれちゃったわ。
　ハリーは必死に笑いを噛み殺している。ユウは真っ赤な顔をしてお茶を入れ直すためにプレートを持って出ていった。あたしはなんか気が抜けて部屋に戻ると近くの椅子に座った。

　しかし、ビックリしたわね。あの大人しそうなユウが、あんなに感情を表に出すとは思っていなかった。案外とユウの方があたしなんかよりよっぽど強いんじゃないかしら。間違ってもユウと喧嘩するのだけは止めておこうっと。
「おい、今までどこでどうしていたのか話せよ。」
　ユウがお茶を入れ直してくると、アトリーがハリーに言った。
「そうだな、大変だったんだぜ。」
　ちょっと思い出すように首を傾げてみせて、それからゆっくりと話し始めた。
「あの時の爆風で見知らぬ惑星に転移しちまってさぁ、生命は助かったものの、科学の遅れた惑星じゃ連絡の取りようもないし、もう生きていくだけで精一杯という感じだったんだぜ。」
「どこだったんだ？」
「あぁ、そこは三Ａ次元の球河って惑星でね、とりあえず人が住んでいる街まではたどり着いたものの、転移装置どころか次元の観念もないような惑星だったし、しばらく畑の手伝いをしながら住み込みで働かせてもらっていたんだ。そしたら、ある日いきなりシグマが現れて、助かったってんでシグマに頼んでこっちに送ってもらったんだが、それがキャンターだったんだよ。」
「ねぇ、キャンターって？」
「ん、ここから三百光年くらい離れている惑星だよ。」
　あたしがちょっと口を挟んだのに、気にも留めずにハリーは親切に答えてくれる。
「まぁ、それでもここまで来ればフェリアに帰るのは楽だなって思っていたら、なぜかシグマがフェリアには戻るなって言ってね。じゃあ、せめて連絡ぐらいはさせてくれと言ったんだが、それすら駄目だって言われて、仕方がなく今まで黙っていたって訳。」
「じゃあ、ずっーとキャンターにいたって訳か？」
「ところがそうでもなくて、シグマにくっついてジュールまではよく来ていたんだぜ、クシィってコードネームでね。」
　そう言いながら片目をつぶってみせる。
「シグマのやろう･･･、そうならそうだと言いやがれってんだ。」
　アトリーはバタッと足をテーブルの上に投げ出して、手を頭の後ろに組んでふんぞり返る。おおよそさっきまでのリーダとしてのアトリーとは似ても似つかぬような言動。
「でも、まぁ、よく帰って来たよ。」
「そうよ、あたしは帰ってきたくれただけで、もうそれで十分。」
　うわっ、まるで台詞の後ろにハートマークでも付くといった感じ。ユウも随分と感じが変わったわ。まったく羨ましい限りよねぇ。こんなに真剣になってくれる仲間がいるなんて。それもこれも帰ってこられたからなんだけどさ･･･。ん、帰ってきた･･･？
　三Ａ次元から帰って来たって言ってたわよねぇ･･･。ちょっと待ってよ、まさか帰る方法があるってこと？
「ねぇ、ハリー、さっきどうやって球河から帰って来たって言った？」
「どうやってって、シグマの転移装置でだけど。」
「そう、その転移装置よ。それってどこにあるの？」
「だから、シグマが･･･。」
「違うわよ。フェリアで他にはないのって言いたいの。」
「あ、そういうことか。」
　やっと分かってもらえた。あぁ、これくらいはサッと察してほしかった。･･･って言ったって、ハリーはあたしの事情を知らないだから無理か。
「はっきり言うとないんじゃない？ジュールならともかく、フェリアなんて何もない惑星だもんな。ジュールの転移装置も大半はトリプタンに破壊された筈だし、この次元で他に持ってんのって、俺の知る限りじゃシグマとラムダの二人だけだぜ。な、アトリー。」
「うーん、そうだなぁ、ちょっと他には思いつかないな。それにラムダのはべつに転移装置って訳でもないだろう。やっぱりシグマだけなんじゃないのか。」
「そうなの･･･。」
　そういう意味だったのね。だから方法がない訳じゃないけど帰れないって言ったんだ。でも、まるで可能性がないって訳でもないって分かっただけでも、ま、いいか。

「そもそもさぁ、転移装置ていうのはシグマが開発した物なんだよ。だからって訳でもないけど、この世界に絶対数がそんなにないんだよね。あの男も忙しいし量産出来る物でもないらしいし。」
　ハリーが目いっぱい申し訳ないって顔して解説してくれた。ま、いいんだけどね。でも、余計にシグマとラムダって二人には会いたくなってきたわ。
　その後、暫く4人で雑談してて、あたしがふと腕時計を見ると･･･15時半、15時半というとぉ･･･。ザルは四時間ごとに交代する訳でしょ。
「ねぇ、そろそろイエローザルが出る時間じゃないの？」
「ん、もうそんな時間か。そろそろ装備のチェックにでも行くかな。ハリー、一緒に来るか？」
「いや、俺はシューザーで行くよ。あとでラムダと合流しなきゃならないんでね。」
「そうか、じゃ、ユウとレイコちゃん、あとを頼むよ。」
「はい。」
　ハリーはユウにウインクしを送ると、左手をちょっと上げてオペレーションルームを出ていった。アトリーは肩をすくめて、あたしに意味ありげな笑いを残したままハリーの後を追っていった。
　あたしはというと、なんか頭の中で最後まで思い出せなかった記憶が、少ぉしずつ染み出してくるのを感じて、暫くボーッと天井を眺めていた。だけど、それはまだきちんとした形になっていなくて、すぐ目の前まで来ているのに手が届かないような感覚が続いている。そして、今はそれがすごくもどかしい。
「どうしたんですか？なんか顔色が悪いみたいですけど。」
「えっ、ううん、べつに何でもないわよ。」
　適当に言ってごまかすつもりだったんだけど、ユウはまだ何か言いたそうな顔をしているのを感じてしまった。
「あの、こんなことを言ってはいけないとは思うんですけど･･･。」
「どうぞ、言ったって構わないわよ。」
「あの、あたし、はっきり言って、もしシグマに会えたとしても、レイコさんに帰ってほしくないんです。」
「えっ？」
「あの、一年前にサーミンがフェリアに来た時、サーミンはレイコさん以上にパニック状態に陥ったんです。結局はみんなして宥めて、事情を話して、彼女は戦うことに協力してくれることになりました。だから、みんなはそのことを知っているから、今回必要以上にレイコさんに気を使っているんです。」
「ユウ･･･。」
　ユウが何を言いたいのか分かるような気がする。前にサーミンに訊いた時、帰りたいって言い出す人がいないって言ってたっけ。そうよ、トリプタンを倒すんだって心に誓った筈じゃない。
「ユウ、大丈夫よ。このまま帰ったりするもんですか。でもね、地球にやり残してきたことが多いのも事実なのよね。べつに焦っている訳じゃないけど、帰り道は押さえておきたいじゃない。」
「本当に？」
「本当よ。約束したっていいわ。」
　途端にユウの顔に安堵の色が現れ、またすぐに暗く沈んでしまった。
「レイコさん、あの、すいません、生意気なことを言ってしまって。」
「そんなこと気にしなくたっていいわよ。あたし、ユウにはいろいろと感謝しているんだから。」
　本当に参っちゃうわ、ユウの方が年下だっていうのに。あたし、さっきまできっと嫌な顔をしていたんだろうなぁ。でも、これでやっとスーッとしたって感じ。ついでに思い出しかけているものもはっきりすると嬉しいだんけど、それは欲張り過ぎって言うものか、まぁ、いいや。
「あの、そろそろレーダールームの方に行ってないと･･･。」
「あ、うん、じゃあ行こうか。」

　オペレーションルームにも通信システムはあるんだけど、ユウの説明によれば別にちゃんとレーダールームがあって、そっちの方が性能が良いので作戦の際はそっちを使うとのことらしい。
　で、オペレーションルームを出ようとしたんだけど、ドアの前まで来るとまだ何もしていないのに勝手にパッと開いて、ジンくんが物凄い形相で飛び込んできた。思わず二人であとずさってしまう。
「ハァ、ハァ、ハァ、ハァ･･･。」
「ど、どうしたのよ。」
　一瞬、何か緊急事態でも発生したのかと思って、二人して自然に身構えてしまう。とにかく、何が起きたのか聞かなきゃとジンくんの次の言葉を待った。ジンくんは暫く息が荒く辛そうにしていたけど、やっと一言だけ絞り出すように言った。
「み、水をくれぇ！」
　ユウが慌てて冷めたコーヒーを差し出すと、ひったくる様にしてジンくんは一息に飲み干した。
「ねぇ、どうしたのよ。」
　ちょっとイライラしてもう一度訊くと、ジンくん、カップを返しながら思い出したように叫んだ。
「そうだ！ユウ、ハリーが生きていたって本当か？」
「何を言ってんのよぉ。もうアトリーと一緒に出ていっちゃったわよ。ジンくんも早く行かないと、置いていかれても知らないからね。」
「わっ、じゃ、行ってきます。」
「あっ、ジン！」
　行きかけたジンくんをユウがとっさに呼び止めた。
「あたし、あの人のこと、ぶっちゃった。」
　ジンくん、ニヤッと笑って敬礼すると、転がるように駆けていった。あたしたちも足早にレーダールームへと歩き出す。
「ジン、ユーリ、ハリーとあたしの四人は、家が近所だったこともあって小さい頃からよく遊んだ仲だったんです。四年前の時のことも、ジンは自分のミスでハリーが死んだと思っていたから、だからあたしはジンの気持ちもよく分かるんです。」
「ユウ･･･。」
　その先の言葉は飲み込んだ。だって、それは誰よりもユウ本人が一番知っている筈だったから。
「レイコさん！」
　先を歩いていたユウがいきなり足を止める。あたしはユウの身体を避けようとしてちょっとつんのめった。あたし、まだレーダルームの場所なんて分からないから、どうしてもユウの少し後ろを歩く格好になるのよね。だから、三つ目の角を曲がろうとした所でいきなり立ち止まられると、あたしは勢いユウにぶつかるしかなくなる。
　いったい何があるのかと思って、ユウの肩越しにそーっと通路の先を覗いてみると、通路のど真ん中でウィリーくんが長々とひっくり返っている。
「あれ、どうしたの？」
　ユウにそっと小声で訊いてみる。
「誰かいるみたいなんです。ウィリーがあれだけのサイズになっているということは、少なくともこの基地の者ではありません。」
　これはビュレットから聞いた話し、ウィリーくんは感情の動きで大きくなったり小さくなったりするんだそうだ。つまり、嬉しさが大きければ、それだけ身体も大きくなったりするって訳。でも、今の状況から推理するとすれば、ウィリーくんが大きくなったのは嬉しさといより怒り、おそらくは敵対心からだと思う。そうじゃないと、ウィリーくんがこんな所でのびている理由が見つからない。
「どうする？」
「誰だか確認しないことには。レイコさん、そーっとついて来て下さい。」
　あたしは目で頷いて、ユウの後ろを忍足でそーっとついて行く。レーダールームのドアにピタッと耳を付けて中の様子を窺うと、中からは笑い声が聞こえてきた。しかも女の子。ビュレット？

　ユウにもすぐ分かったらしく、あたしに合図を送ると思い切ってドアを開けた。
「ほうら来た。だから言ったでしょ、ここで待ってればすぐに現れるって。」
「ん、信じなくて悪かったよ。」
　レーダールームの奥、ビュレットと向かい合わせに立っている男、片目が隠れるくらいの長い前髪で、ちょっと見た目は格好いい。
「あなた、誰なの？」
「俺かい？俺はラムダくんじゃない、嫌だなぁ、ユウちゃんも一緒にいるっていうのに、忘れて欲しくないよなぁ。」
　えーっ、このいかにも軽薄そうな男がラムダぁ。駄目だぁ、イメージが思いっきり崩れたわ。
「もしかして、この計画の首謀者のラムダな訳？」
「もしかしなくても、そのラムダくんです。なぁんだ、分かっているんじゃない。えーっと、リンちゃんだっけ？」
「リン？なんであなたがその呼び方を知っているのよ。」
　あたしのことをそう呼ぶのは、この宇宙がどんなに広くったってただ一人、桂木さんだけの筈なのに、どうしてそれを初対面のこの男が知っているのよ。
「あれっ、違ったっけ。いや、シグマがそう呼んでいたもんだから。まぁ、どうでもいいか。」
　もぉ･･･前言撤回。なんでこんな男を格好いいと思っちゃったんだ。軽薄で阿呆なだけの奴じゃない。はっきり言って、こういう軽い男ってパスしたい。
「それで、そのラムダさんはなんでこんな所にいる訳？みんな、あなたの計画で出て行ったのよ。」
「そうですよ、さぁ、何でこんな所にいるんですか？」
　ラムダったら詰め寄るあたし達に向かってニヤリと笑うと、ゆっくりとあたしを指差した。
「な、なによ。あたしが何だっていうのよ。」
「いや、お宅を迎えに来たんだ。アトリーには俺から許可を取るからさ、一緒に来てくれないか？」
「どうしてあたしがあなたと一緒に行かなきゃならないのよ。あたし、こういう冗談って嫌いなんだよね。」
　でも、真面目に言っているのか、単にからかうためだけなのか 、この人の場合よく分からない。突っぱねるつもりではあるけど、なんとなく心に引っかかる部分もある。
「奇遇だなぁ、俺もこういう冗談は嫌いなんだ。だけど、もし俺と一緒に行く理由が欲しいって言うなら、そうだなぁ、シグマがお宅に会いたがっていた、こんなもんでどう？」
　うぅ、真面目なら真面目、ふざけるならふざけるではっきりとして欲しい。
「どうせ口から出任せを言っているんでしょ。そんなの信用できないわよ。」
「ふーん、そうかぁ、お宅はシグマに会いたいんだと思ってたんだけどなぁ。あーあ、シグマくん、かあいそうに･･･。」
　まったく、実に痛いところを突いてくるんだから。
「そうは言ってないじゃない。あたしはただ･･･。」
　あたしが最後まで言い終わらないうちに、ラムダは右手の人差し指をあたしの唇の前に立てて、その先の言葉を制した。
「悪いんだけどさ、遊んでいる時間がなくなってきたんだ。行くのか行かないのか、すぐに決めてくれないかな。べつに強制はしないからさ。」
　ん、なによぉ、急に真面目な表情になっちゃって。でも、まともな顔さえすれば、やっぱりいい男かもしれない。
　あたしがどう答えていいか悩んで黙り込んでしまうと、もう一回ニヤッと笑って元の表情に戻り、デスクの上に腰をかけてふんぞり返った。
　うーん、困っちゃうなぁ。顔はいいんだけどねぇ、この性格が信用できない･･･。だけど、チャンスと言えばチャンスだし、いま一つ信用しきれないんだけど、まぁ、行ってみるか。
「ねぇ、ユウ･･･。」
「えぇ、分かっています。行ってきてもいいですよ。あとのことは任せて下さい。」
「本当にいいの？」

「えぇ、あたしはさっきのレイコさんの言葉を信じていますから。」
「ありがと。あとできっと穴埋めをするから。」
　ユウに頭を下げると、改めてラムダのほうを見た。緑の瞳がすごく綺麗。どこかで見たような気もするけど、今はそれを捜している場合じゃない。
「それじゃ、行きましょうか、ラムダさん。」
　わざとデスクの上に座っているラムダの腕を引っ張ったら、バランスを崩してあたしの上にもたれ掛かってきた。ちょうどラムダの顔があたしの胸の辺りにきて、ラムダは慌ててあたしの腕を振り払った。
「な、いきなり何すんだ。」
　あはっ、ラムダの顔が真っ赤。意外と純情なんだ。ふーん、これはあとで使えるかもね。
「あれ？顔が真っ赤ですよ。どうかしたんですか？」
「く･･･、くぉのやろう･･･。な、何でもないさ。さぁ、行くぜ。」
「はい。」
　乱暴にテーブルから飛び降りて行こうとするラムダに、今度はしっかりと腕を掴んで組んでしまった。途端に厳しい目つきであたしを睨む。
「さぁ、行くんでしょ。」
「うーっ！この小悪魔め。」
　我慢し切れずについにユウが笑い出した。つられる様にしてビュレットも吹き出している。
「勝手にしてくれ！」
　あたしを引きずったまま乱暴にレーダールームを出て行こうとするラムダに、ビュレットが追い討ちの一言を浴びせる。
「ラムダとレイコお姉ちゃんって、そうやってみると意外にお似合いね。」
「ぐっ！」
　ラムダはキッと睨みつけたけど、こんな格好じゃ恐い訳がない。
「ビュレット、ありがとねぇ。」
「ラムダの手ぇ離しちゃ駄目だよぉ。」
　あたしはわざと 手なんぞを振ると、今やこれ以上赤くはなれないだろうって 程の真っ赤な顔で、ズンズンあたしを引っ張っていく。
　ふーん、今後うるさいことを言うようなら、またこの手で虐めちゃお。
　さぁて、ところでさっきは悪ふざけでごまかしちゃったけど、よぉく考えたらシグマに会えるんだ。本当に桂木さんなんだろうか？でも、あのラムダの言い方･･･、やっぱり桂木さん以外には考えられない。でも、どうして？
　なぜシグマが桂木さんなのよ。分からない、あまりにも分からないことが多すぎる。たしかに桂木さんが普段どんなことをしているかなんてよく知らないけど、普通はよその惑星に行ってコンピューターの化け物と戦っていますなんて言わないもんね。
　ん、気がついたらいつの間にかに基地の外に出ちゃっていた。格納庫に行くんだとばかり思っていたあたしは目をパチクリ。
「ねぇ、どこに行く気？」
「･･･。」
　ラムダはチラッとあたしの方を見て、でも何も言わない。
「ねぇったら、教えてくれたっていいじゃない。まったくぅ、そんな風に黙っているとかぁいくないわよ。」
「うるさいな、ジュールに決まってんだろうが。」
「ジュールって･･･、ちょっとぉ、まさかジュールまで歩いて行く気じゃないでしょうね。」
「莫迦･･･。」
　うわぁ、怒られるかと思うくらい恐い真剣な瞳で睨んだ後、ゆっくりと笑顔が混ざる微妙な表情で、あたしの髪の毛をクシャっと崩した。
「あのなぁ、本当に時間がないんだ。少し黙っててくれ。」
　ラムダは基地から３百メートルくらい離れた所で急に立ち止まった。今度はどちらかと言うと満面な笑みを浮かべて。

　急に何が始まるのかと思って見ていると、左の手首に付けている腕時計みたいな物をチョイといじった。すると、目の前にブーメラン型の飛行機。たしか、ユウが見せてくれた資料によるとアルテミスっていう名前だったような気がする、それが唐突に現れた。
　真っ黒なボディにブルーラインが入っていて、翼の部分には銀色に輝くΛの文字。ゼウスの格納庫にあった奴とは雰囲気がかなり違うわ。
「な、な、な、な･･･。」
「なんて声を出すんだよ。早く乗ってくれ。」
　言葉にならないっていうのはこういう状況のことを言うんだろうけど、まじめに何か言おうと思っても言葉が出てこなかった。ラムダはさっさとアルテミスに乗り込むと、驚きで呆然としているあたしに偉そうに命令する。
　ちょっとカチンときたけど、時間がないっていうのも事実なんだよね。レッドザルが地平線にかなりかかってきている。あたしは黙ってシートに腰を降ろした。
　あたしがシートベルトを締めたのを確認すると、ラムダはゆっくりとアルテミスを上昇させていく。ラムダの横顔にはさっきまでのにやついた雰囲気は微塵もない。あっという間に目の前の景色が下の方に流れて、群青色の空間が目の前を占める。あたしの足元にはフェリア全体が見渡せるようになったと思った瞬間、頭の上からでっかいジュールが降ってきた。
　その遥か後方には赤く燃えるレッドザル、黄金の炎を放つイエローザル、淡い緑のグリーンザルが並んでいるのが見える。
　なぁんてね、これぜーんぶアルテミスのナビゲーションシステムに教えて貰っちゃった。だって、そうでもなきゃ、初めて見る星の名前なんて分かる訳ないもん。
　いまちょうど正面にあるジュールには、いくつかのステーション基地が浮かんでいる。あたしはナビゲーションの助けを借りて、その中からアリンⅡを捜し出した。そのアリンⅡの近辺には今しも攻撃を仕掛けようと、スラッグ、シューザー、それにシルバーボディに赤いラインの入ったスタンダードタイプのアルテミスが待機している。
　あたし達のアルテミスのレーダーがアリンⅡを確認した途端、さっそく通信機の赤いランプが点灯した。真っ先に飛び込んできたのはアトリーの声。
「ラムダ、おまえ、レイコちゃんに怪我でもさせてみろ、二度とフェリアに降りれないと思えよ。」
　小型のモニターいっぱいにアトリーの怒った顔が映る。･･･と、すぐにその映像が尾田さんとサーミンの顔に変わる。
「そんなもんで済まさへんで。必ず見つけ出してギタギタにしばき倒したる。」
「みんな嫌だなぁ。そのセリフは俺じゃなくてシグマに言ってくれよ。」
「ド阿保！いま連れ出したんはラムダやろ。お宅が責任をもってレイコを連れて帰ってくるんよ。」
　小型のモニターなのに、サーミンの顔がアップが凄い迫力。ほんと、これ小型のモニターで助かったわ。もしラオコーンの大スクリーンだったら、きっと心臓がもたなかったんじゃないかと思うほど。
「はい、はい、了解しました。よぉく分かりましたよ。それでは時間もないようなので、わたくしめことラムダくんはレイコ姫を連れて、一路ジュールへと向かうことと致します。では、どちら様もお元気で。」
　何を考えているのか、ラムダが唐突に高い声でふざけてみせる。一瞬、モニターのサーミンの顔がポカンとなり、アトリーの方に映像が切り替わる。
「じゃあ、シグマによろしく言っておいてくれな。」
「そうそう、お宅は当てにならんけど、シグマやったら安心できるからね。」
　叫び声だけサーミンが割り込んでくる。
「サーミン！そりゃないだろ。」
「きゃははは･･･。」
　頭に手をやって駄目だってゼスチャーをするけど、そのくせ瞳だけは茶目っ気たっぷりで、あたしに向かってこう言った。

「俺さぁ、時々思うんだけど、ひょっとしたらトリプタンよりも先にサーミンをやっつけた方がいいんじゃないかってね。」
　うーん、それは言えているかもしれない、サーミンを怒らせると恐いもんねぇ。なんとなく納得できてしまうところが恐い。
「ラムダぁ！その台詞、忘れなさんなよ。」
「うわぁ！スイッチを切るのを忘れていた。」
　モニターのスイッチは切ってあったのに、音声の方はオンになっていた。あたしは呆れて、ラムダの手を制してスイッチを切った。
「やめた方がいいわよ、どうせサーミンにゃ勝てっこないんだから。それよりちゃんとジュールに行けるんでしょうね。あたしはまだあなたの腕を信用していないんだから。」
「へいへい、んじゃ、一丁ここらへんでいいところでも見せるとしますか。」
　ラムダが操縦桿を握り直すや、突然ガクンと後ろに叩きつけられるようなショックを受けて、見る見るうちに目の前のジュールに吸い込まれていく。だけど、すぐ後ろにフェリアを背負っているせいか、あまり恐いって感じはない。
「ねぇ、ラムダぁ、ちょっと気になってんだけど、お宅ってどこの惑星の出身なの？」
　そうなのよねぇ、初めて会った時にも感じたことなんだけど、どうしても地球人とは思えないんだよね。べつに外見が地球人タイプじゃないって訳じゃないけど、持っているイメージカラーっていうのが、なんか地球人ともフェリア人とも違うのよねぇ。しかもどういう訳だか、これは勘なんだけど、見た目よりもかなり年上に感じる。
「ねぇ、教えてよ。」
「さぁてね、もう忘れちまった。」
「そんなぁ、まじめに答えてよ。」
「俺はいつでも真面目ですよぉ。」
　も一頭にきた。どうしてこの人はこんなに軽薄なのよ。
「ケチ！教えてくれたっていいじゃないのよ。あ、分かった、ラムダのことだから、自分の惑星から追い出されたとかなんでしょ。だから、恥ずかしくて何も言えないとか。
「違う！」
　えっ？一瞬、ラムダの声にものすごい力が入ってた。
「違うよ、そんなんじゃない。」
　あまりの真剣さに驚いてラムダの顔を見ると･･･。
　この時の顔、あたしに見せたラムダの横顔は、あたし、二度と忘れることができないと思う。憎悪、まるで突き上げるような憎しみの裏側に、限りないまでの哀しみ、寂しさ、そんな物が全部混ざり合ったような表情。あたしの心に直接突き刺さる。
　あたしは調子に乗りすぎたことを知って、猛烈に後悔していた。
「･･･ごめんなさい。」
　狭い機内にたった一つの言葉だけが小さく響く。
　結局、それ以上の言葉は見つからず、ラムダもそれっきり何も言ってくれないんで、トリプタンの防衛ラインを超えるまでず一っと黙ったまんま。お互いになんとなく気まずい雰囲気になっちゃって、もうなんてことを言ってしまったのかと反省することしきり。
　あたしが一人で自己嫌悪に陥っていると、ラムダがいきなり笑い出した。いったい、何が起きたのかと再び驚いていると。
「まったく、こんなつもりはなかったんだけどな。そろそろジュールに降りるからさぁ、そんな暗い顔も止めようよ。」
　ラムダの顔をもう一度見てみると、精一杯ポーカーフェイスを作っているみたいに見えるけど、髪の毛の間から見えている耳が真っ赤。なんか嬉しくなってきちゃった。
「ふーん、なんとなく分かってきたわ、ラムダの性格。」
「急になんだよ。」
　あはっ、今度こそ心の底から笑えそ。
「ちぇっ！サーミンといいお宅といい、どうして地球の女ってこういう性格なんだ。」

　ラムダのふてくされたような口調も結局は照れ隠しだってことが分かってきた。だけど、これで完全に雰囲気が和らいだかな。何気なくジュールを見ると、もう地表の建物がはっきりと見える。暫く飛び回っていて、広場のような所を見つけると静かに着陸した。
　しかしねぇ、割とすぐ目の前に塔が見えているんだけど、普通に考えるとこれってやばいんじゃないかなぁ。ほとんど崩れた建物しかない中で、この塔だけはきれいで、しかも明かりが点いている。
「ねぇ･･･。」
　あたしがそのことを訊こうとすると･･･。
「降りて。」
「へっ？」
「へっ？じゃないの、着いたんだから降りてくれって言ってるの。」
「あ、うん。」
　気がついたときにはラムダは先にアルテミスから降りていて、腕を組んであたしの降りるのを待っている感じ。大丈夫なのかなとは思いつつも、あたしはなんだか拍子抜けしちゃって、素直にアルテミスから降りることにした。
　あたしがアルテミスから離れたと同時に、ラムダはまた例の左腕に付けている物を操作してアルテミスを消し去った。
「ねぇ、こんな所に降りて大丈夫なの？」
「まぁ、大丈夫じゃないだろうな。なんたってトリプタンの目と鼻の先に着陸したんだから。」
　や、や、や、やっぱりぃ、なぁんかそんな気がしたんだよね。
「どうしてそんなに落ち着いていられるのよぉ。早く逃げようよ。」
「大丈夫だよ。」
「えっ？」
　こっちは慌てているっていうのに、余裕の笑顔だか何だか知らないけど、とびきりの良い顔でそう言い切った。
「ジュールの防衛網って意外にとろいんだよね。末端の防衛ラインを割られるなんてプログラムがされていないらしくてさ、中央のシステムに伝わるまでにかっきり３０分はかかるんだ。まぁ、そのおかげでこんな奇襲作戦が成り立つって訳なんだけど、そうだなぁ、あと１０分くらいは大丈夫かな。ん、あそこだ。」
　キョロキョロ辺りを見ながら喋っていたラムダがようやく目標物を見つけたらしく、急にあたしの腕を引っ張って走り出した。何が何だか分からないけど、とにかく仕方ないから一緒に走り出した。だけど何なのよ、このコンパスの差は。一所懸命に走っているのにどうしても引っ張られる形になる。
「ちょっ、ちょっとぉ、いったいどこに行こうっていうの？」
　言っておいて自分でも莫迦な質問だなって思いながらも、とりあえず大声で怒鳴ってみる。と、意外にもラムダは立ち止まって振り返った。
「あのなぁ、トリプタンに見つかってから逃げても遅いんだぜ。それともこんな所で死にたいのか？」
「えっ、あ、そうよね、ごめん。」
　冗談じゃないわ、こんな所で死ぬなんて真っぴらごめんだわ。
「もう遅い。･･･ったく呑気なんだからな。いいか、よぉく見ていろよ。」
　そう言って指差した場所が、眩い閃光とともに一瞬にして蒸発してしまった。さっきアルテミスが着陸した所。
　たしかに、もしあのままあの場所にいたら、今ごろあたし達はあの世に旅立っていたかも。
　閃光をまともに見たせいかな、目の前がサーッと暗くなって、立っているのも辛くなってきた。身体が自然と震えてくる。今初めてトリプタンと戦争をしているんだということが、あたしの中ではっきりと認識できたみたい。
　ラムダが何かを言っているみたいだけど･･･駄目、神経がおかしくなっていて何を言ってんだかまったく分からない。
　あっと思った時にはラムダの腕の中に倒れこんで、次第に意識が薄れていくのを感じていた。

ＡＣＴⅣ　「OPERATION LAMDA」

S60.10.APR <<H19.6.FEB>>

ＡＣＴⅤ　「TRIPTAN」

　ぼそぼそと聞こえてくる男の人の低い声。その声でなんとなく目を覚ました。ゆっくりと身体を起こして、自分の周囲を見回してみる。
　どこかのビル？
　とにかく何もなくてガラーンとしたフロア、所々に崩れかかった柱があるだけで、あとはゴミすらも落ちていない。割と最近に掃除している感じはする。
　あたしは用心深く立ち上がると、ちょっと考えて手近の窓から外を眺めた。まぁ、窓と言ったって、ガラスも入っていない様なただの壁の穴だけど。でも、窓から見えた外の景色は、ただの景色なんかじゃなかった。どう言って表現すればいいのか困るくらい、とても奇妙な感じが漂っている。
　しかも、あたしはこの景色をこれまでに見たことがある様な気がする。何故だか分からないけど懐かしさを感じて、あたしは暫くこの風景を見入ってしまった。近代的な建築物の中に戦闘の傷跡をあっちこっちに残した街。その遠くの方に高い塔が見える。ジュールに降りた時にすぐ近くに見えていた奴。そして、その塔のさらに向こう側にレッドザルが落ちていくのが見える。
　だけど、ジュールとフェリアじゃ何かが違うのか、空はちゃんと見えていて、ちゃんと地球にいて、地球の風景を見ているかのような気になってくる。
　青い空、赤い夕焼け、近代的なビル･･･。
　頭の中を何かが駆け抜けて、そして、あたしはどうしてこの風景を懐かしく感じるのか、その理由を不意に気がついた。
「驚いただろ。この辺は新宿の駅前によく似ているからね。」
「えっ？」
　いきなりあたしの後ろから響いてきた声。おそらくはさっきぼそぼそと話していた人の一人。でも、ラムダじゃない。そう、たぶんシグマっていう人。
　後ろを振り向きたい。でも恐い気もする。だって、その声には聞き覚えがあったから･･･。忘れようたって忘れる筈のない、あたしの一番聞きたかった声。
　だけど、あたしが後ろを振り向いてしまったら、それが実は全部幻で、そこに立っているのがあたしの知らない人だったら、そんなことが頭の中をぐるぐると駆け巡ってどうしても振り向くことが出来ない。
「リン、遅くなってごめんな。でも、元気そうで安心したよ。」
　もう間違えっこない。幻でなんかある筈がない。桂木さんだ、桂木さんがいるんだ。あたしのすぐ後ろに･･･。
　あたしはゆっくりと、そして思い切って振り返る。
「か･･･桂、桂木さん！」
　目の前には見慣れた笑顔があたしを優しく包んでくれていた。
「もう少し早く来るつもりだったんだが、意外と修理に手間取ってね。」
「ううん、いいのよ･･･。」
　あ、駄目ぇ。桂木さんの笑顔を見たら涙腺が緩んできちゃった。涙が止まらない。
　いつの間にかラムダが傍に来ていて、あたしのことをニヤニヤ笑いながら見ている。不思議とそれを嫌だとは思わなかったけど、妙に恥ずかしい感じもする。
　あたしは二、三歩前に足を踏み出すと、そのまま倒れこむように桂木さんの腕の中へ飛び込んだ。
「桂木さん！」
　あたしは思いっきり泣いた。こんなに泣いたのって小学生の時以来の様な気がする。もう、後から後から涙が溢れてきて止まらない。
　どのくらい泣いていたんだろう。その間ずーっと黙って抱いていてくれていた桂木さんには感謝。でも、なんだか思いっきり泣いたらすっきりした。もう大丈夫。
「気が済んだか？」
「うん、ありがと。」

「よしっ、んじゃ、ぼちぼち行こうか。」
　そう、いつまでも泣いていたってしょうがないわ。あたしには大事な使命があるんだもんね。あたしは涙を拭って一人で立ち上がった。
「ねっ、これからトリプタンに潜入するんでしょ？」
「ん、それなんだがなぁ･･･。」
「何よ？」
「いや･･･。なぁ、ラムダとも相談したんだが、やっぱりリンはラオコーンに帰ってろ。」
「なんでよぉ、ここまで連れてきておいて、いくらなんでもそりゃあないんじゃない。あたしは最後までつき合うわよ。」
　思いっきり桂木さんを睨みつける。
　･･･と、ラムダがニヤニヤ顔のまま、桂木さんの肩に手を置いた。
「シグマぁ、無駄だぜ。この子の性格は、あんたが一番よく知っている筈だろ。」
「そりゃそうだがな。なぁ、頼むから言うことを聞いてくれよ。」
　あたしは黙って首を横に振る。
　桂木さんの気持ちはよく分かるし、それはとっても嬉しいけど、あたしとしてはここで帰る訳にいかない。
「仕方ねぇな、連れて行くしかないんじゃない？」
　桂木さん、暫しあたしの顔を見て、そして諦めたように言った。
「よし、それじゃあ、出発だ。」
　あたし達は崩れかかったビルから出ると、あの高い塔を目指して歩き出した。周囲は瓦礫の山で、ほとんど道なんてあって無きに等しい状態。先頭を歩いている桂木さんが選んでくれた所を注意深く歩いていく。
「ねぇ、桂木さん、ちょっと訊いていい？」
　ほんとはあまり注意力を妨げたくないはないんだけど、ちょっと気になったんで思わず話しかけてしまった。
「ん、なんでもどうぞ。俺に分かる範囲ならいいんだけど。」
「うん、あのねぇ、あのコンピューター、かなり大きいみたいなんだけど、いったいどうやって壊すつもりなの？たしか何かで聞いたんだけど、あのランクのコンピューターって自己修復機能を持っていて、中途半端な攻撃じゃ逆に攻撃されるって。」
「その通りなんだよな、それで困っているんだよ。だいたいあの手のコンピューターってぇのは、基本的には絶対に壊れないことになっているんだ。そういう風に造った筈なんだから。」
「変なところで感心してないでよ。まさか何も考えずに攻め込むつもりだったの？」
「まぁ、そういうことになるな。」
　虚脱感！身体中の力がいっぺんに抜けていくような気がする。急に勝とうという意欲が失せてきたわ。まったくぅ、何が哀しくて壊れないコンピューター相手に、何も考えなしに喧嘩を売らなきゃいけないのよ。今の桂木さんの答えで地球が思いっきり遠くなった、そんな気がするわね。
　サッサと先に行っちゃう桂木さんを見ながらボーッと立ちすくんでいるあたしの肩を、ずーっとあたしの後ろを歩いていたラムダがポンッと叩いた。
「大丈夫だよ、心配ないって。口ではああ言っても、本当に何も考えないで突っ込むような奴じゃないだろ。きっと何か考えを持っているんだろうけど言いたくないのさ。」
　そう言ってウインクしてみせる。
「そんなこと、お宅に言われなくたって分かっているわよ。」
　そう、分かっている筈なのに･･･。
「分かっているなら上等さ。さ、早く歩かないと置いていかれるぜ。」
「うん。」
　ラムダに促されてなんとなく歩き始める。こんな言葉ぐらいで立ち直れる程、あたしは単純じゃなかったつもりだけど。でも、ちょびっとは元気が出たかな。
　それから三時間ほど、初めのうちは意外に近くに感じていた塔が、いくら歩いてもいっこうに近づいてくれないことに気がついた。二人ともあたしの速度に合わせてくれているみたいなんだ

けど、どうしてもあたしだけが少しずつ遅れがちになっちゃう。あたしとしてもこんな場所で置いていかれるのもたまんないから、必死に歩いていたんだけど、もう駄目、一歩も歩けない。
「ま、待ってよ。ちょっとでいいから休憩しようよぉ。」
　ちょっと先を歩いていた二人が立ち止まって、ニヤニヤしながら振り返った。
「ここが限界か。まぁ、意外に頑張ったんじゃないの。」
「あぁ、そのようだな。正直言って、俺もリンがここまで頑張るとは思わなかったよ。これがリンの能力なのか、まぁ今はどうでもいいことだけどな。」
　な、何よ、その意味あり気な言い方。
「それにここからならアルテミスを使うまでもないだろ。ラムダ、ヘルメスを出してくれ。」
「了解！」
　何よぉ、二人だけで分かっていて嫌な感じ。あたしには何も分からないじゃない。
「ちょっとぉ、どういうことなのよ。」
「いや、べつに。なっ、シグマ。」
「そうそう、どうせ初めから歩くなんて言ったって素直に歩く訳ないだろうからね。」
「まさか･･･。」
「そういうこと。」
　ず、ずるい･･･。そりゃあね、たしかにそうだけどさぁ、あまりにもやり方が汚いじゃない。あたしが一人でブツブツ言っている間に、ラムダが例の腕時計みたいな奴を操作した。まったく、アルテミスが使えるなら初めっから出してくれりゃいいのに。
　だけど、ぼにゃあと歪んだ空間から現れたのはグレーのボディにブルーの二本線が入ったバギー。そうそう、たしかヘルメスって言ってたっけ。
「ねぇ、アルテミスじゃないの？」
「まぁね、いくらここまで来たら大丈夫と言っても、余計なリスクはなるたけ避けたいからね。まぁ、歩くよりかはいいだろ？」
「そりゃあ、まぁ･･･。」
　なぁんとなく、あたし、桂木さんの手のひらの上で踊らされているような気がしてきたわ。
「おい、早く乗ってくれ。なんか、今の変換エネルギーを察知されたみたいなんだ。攻撃される前にできるだけ近づいていた方がいいだろ。」
　ラムダが急に真面目な顔で叫んだ。
「そうだな、リン、行くぞ。」
「うん。」
　しょうがないか、これだけしっかりとあたしの 性格を掴まれちゃ、反論一つ出来やしないもん。
　あたしがラムダの隣に座ると同時に、桂木さんが運転席に付く。･･･と、その時になんとなくバギーの運転席を見て恐ろしいことに気づいてしまった。
　ぬ、ぬわんと、このバギーにはハンドルが無いのだ。ううん、ハンドルだけじゃない、ギア、アクセル、ブレーキ、ざっと見ただけでもおよそ運転に必要だと思われる物がこのバギーには付いていない。かろうじて訳の分かんないメーターだけが、それらしいと言えばそれらしく付いている。
「ちょっと、ラムダぁ･･･。」
　隣のラムダに聞こうと思ったら、音もなくいきなり走り出してしまった。なんでアクセルも無いのに走り出すのよ。まるで冗談の固まりみたいな車。
「これ特別製でね、シグマ専用に開発された奴なんだ。脳波コントロールで運転しているからハンドルとか余計なもんが付いていないって訳。分かる？」
「ふーん、そうなの。あれっ、でも、あたし、まだ質問してなかったわよ。」
「だけど、当たり･･･だろ？お宅の場合すぐに顔に出るから、何も言わなくたって分かっちゃうのさ。」
「うっ･･･。」
　くやしいー！たしかにその通りなだけに、どうにも反論できないのが一番くやしい。相手が桂木さんなら諦めもつくけど、なんでよりによってラムダにまでコケにされなきゃいけないのよぉ。

も一頭にきた。べつにラムダが一方的に悪いって訳じゃないけど、こうなったら怒る対象をラムダ一人に絞ってやるもんね。
　あたしはキッとラムダを睨み付けて、自分自身にラムダなんかともう二度と口をきいてやんないと思い込ませた。
「な、なんだよ、その目つき。どうせ俺なんかとは口をきかないとでも考えているんだろう。よせよせ、お宅にゃそんな決心したって無理だよ。」
　も一、今の言葉は本当にカチンと来た。いいもんねぇ、絶対に絶対に口なんかきいてやんないから。
　あたしは質問する相手を桂木さんに変えることにした。
「ねぇ、桂木さん･･･。」
「悪い、今はちょっと･･･。」
　言うが言わないかの内に、桂木さんは左手を上げてあたしの言葉を制止した。ヘルメスが少しだけ右へ左へ蛇行する。
　あらら、まずかったかしら、脳波コントロールって言ってたっけ。桂木さん、精神集中しているんだから話しかけちゃいけなかった。
「バーカ！他人の話しはちゃんと聞いていろよな。」
　ラムダがすかさずあたしのことを小突いたけど、あたしは知らん顔してわざと後ろを向いてやった。どうせ、あたしは莫迦ですよ。それならいいもん、目いっぱいいじけてやるからぁ。心の中で思いっきりアッカンベーをした瞬間、変な物があたしの視界の中に飛び込んできた。
　地上スレスレの所を、どう見ても竹輪に翼が生えたようにしか見えない代物が飛んでくる。つまり、このヘルメスを目標に飛んできているとしか思えない程の正確さでついて来ている。まったくぅ、ドラ焼の次が竹輪だなんて、トリプタンってよっぽど趣味が悪いんだとしか思えない。
　桂木さんに言った方がいいわよねぇ･･･。だけど、ここで話しかけると運転の邪魔になるし、仕方がないか緊急事態だもん。
「ラムダぁ、後ろから何か変な物が追ってきてるみたいだけど、あれって敵さんじゃない？」
「えっ！？」
　ラムダがあたしの言葉に反応して後ろを振り向く。
「どうやら間に合わなかったみたいだな。MC-Ⅲ追尾型ミサイル、生体エネルギーに反応する奴だ。シグマ、どうする？」
「どうするって、今から逃げたところで振り切れないだろうな。やっぱり撃ち落すしかないだろう。やれるか？」
「もちろん、こんな所でくたばったって面白くもなんともない。」
　どっから出したのか、ラムダはいつの間にかに銃を構えている。手のひらにスッポリ収まりそうな程の小さい銃。あんな大きいミサイル相手に、こんな小さいので本当に撃ち落とす気なのかしら。
「これ、バニース銃って言うんだ。小型だけどその威力は十分にミサイルを撃ち落すだけの力を持っている。」
　また、あたしが口に出していない質問に答えるラムダ。まったくぅ、そんなことを説明している場合じゃないでしょうに。ミサイルはもう随分近くまで近づいてきている。ラムダぁ、何してんのよ、早く撃ち落しちゃってよぉ。
　うぅ･･･、うわぁ、もう駄目、ぶつかるぅ。
　危ない！身を伏せた瞬間、白い閃光があたし達を包んだ。
「やったぜ！ざまぁみろってんだ。」
　ラムダが叫ぶ。
　た、助かったぁ。
　ん、ちょっとぉ、何よ、あれ？まさか･･･。
　たった今爆発したミサイルのその閃光の中を別のミサイルが三本飛んできているのが、残念ながらしっかりと見えてしまった。ラムダはまだ喜んでいて、どうやら後ろから来ているミサイルには気が付いていないみたい。
「ラムダぁ、残念だけど喜ぶのはちょっと早いんじゃない？次が来ているよ。」

　あたしが指差した方を見たラムダが、今までとは打って変わった声で叫んだ。
「駄目だ、三つ同時じゃ間に合わない！」
「ラムダ、変形しろ！ヘルテミスにするんだ。」
　桂木さんも叫ぶ。
　同時にミサイルが突っ込んできた。
　あたしは咄嗟に狭い車体の中で身を伏せた。こういう場合、こんな所でこんな風に伏せたところでどうにかなる訳じゃないけど、どうしても反射的にそうしてしまうものなのよね。
　5秒、10秒、心の中で数える。だけど覚悟していた衝撃はなく、身体がふわりと浮く感じがして、足の下からミサイルが風を切るキーンという音が伝わってくる。
「い、生きている･･･の？」
「そう簡単には死なないよ。」
　ミサイルが突っ込んできた瞬間、ラムダがジープから戦闘機に変形させたらしく、あたし達は空にいた。
「ラムダ、下だ、下を狙え！」
「了解。」
　一時的にかわせたとは言っても、このミサイル、素直にゃ遠くへ行ってくれそうにない。再び引き返してくるとまっすぐこの機体を目指して飛んでくる。ラムダが格好よく構えたのはいいけど、今度はさっきと違って三つのミサイルが絡み合って飛んでくるために、なかなか思うように狙いが定まらないみたい。
　右手の方からミサイルが突っ込んでくるのを桂木さんがギリギリのところで辛うじてかわす。次のミサイルが下から来る。そして三つ目が正面から･･･。もう、生きているってことが奇跡に近いわね。これ、脳波コントロールのヘルテミスだから助かっているけど、普通のアルテミスだったらとっくに撃ち落されていると思う。
「たまんねぇな、これじゃ狙いようがないよ。」
「生憎と俺も操縦しているだけで精一杯でね。おまえが撃ち落してくれなきゃ、転移するしか策はないが･･･。」
　そう言っているうちにも三つのミサイルが交互に紙一重で機体を舐めていく。
「分かっちゃいるんだけどな、こうちょこまか来られたんじゃあな。」
　その時、ミサイルの一つがヘルテミスのすぐ横をすり抜けた後、遠ざかりながらあたし達の後方で爆発してしまった。そして呆気に取られているあたし達の目の前で残りの二つのミサイルも次々に爆発していく。
「こ、これは･･･、いったい･･･？」
　当然のことながら、ラムダの銃は一回もミサイルには当たっていない。でも、じゃあ何でミサイルが爆発したの？どうにも説明がつかないじゃない。
「シグマ、お宅、念動力も使えるのか？」
「冗談、俺にそんな余裕なんかなかったよ。おまえじゃないのか？」
「俺にそんな能力があるんなら、こんなアホな質問なんかしないよ。でも、そうするってぇとぉ･･･。」
　ん、なんとなく二人の視線があたしに注がれる。
「ちょっ、ちょっと、なんで二人ともあたしを見るのよ。あたしじゃないわよ。」
　あたしは慌てて首を横に振る。
「だってなぁ、シグマでも俺でもないとしたら、どう考えたってお宅しか残っていないんだぜ。」
「だけど、あたしは超能力なんて知らないもん。」
「そんなわきゃないだろ･･･。」
　ラムダが大袈裟な身振りでそう言いかけた時、不意に違う声がヘルテミスの中に響いた。」
「ラムダ、生憎だがな、やったのは俺だよ。」
「なにぃ？」
　ヘルテミスの中の空間がユラユラ揺れて、桂木さんの隣の空いていた助手席に影が現れた。その影は見る見るうちに実像を結ぶと、ついと右手を頭にやり照れくさそうに笑った。

「リョウ！」
　ほとんど同時に桂木さんとラムダが名前を呼んだ。
　これがテレポーテーション･･･、知識としては知ってはいたけど、こんな風だとは思わなかった。はっきりと言って腰が抜けかけた･･･。
「シグマ、久しぶり。しかし、あんたが一緒にいながらどうしたんだよ。」
「いや、悪い、悪い、おかげで助かったよ。暫くこっちにいなかったんでね、ちょっと勘が鈍ったのさ。」
「ならいいけどさ。」
　桂木さんはヘルテミスをゆっくりと降下させて、崩れたビルの陰に着陸させた。
「ところで、よく俺達がミサイルに追われていることが分かったな。」
「レイコちゃんのおかげさ。」
　へっ、あたし？
　遼さんはあたしの方に手を伸ばすと、首から下げていたペンダントを取った。
「これ、発信機になっててさ、ここを押すとゼウスがキャッチすることになってんだ。」
　あーっ、そう言えばサーミンがそんなことを言ってたわねぇ。あれ？でも、あたし、発信機のスイッチなんて入れた覚えないわよ。
「レイコちゃんがこのスイッチを入れてくれなきゃ、俺達も気づかなかったよ。」
「へぇ･･･。」
　三人が三人とも、あたしのことをジーッと見る。あ、どうしよ、スイッチが入ったのは単なる偶然なのに。
「ということは、もしかしてサーミンも？」
　ふぇー、ラムダが話題を変えてくれて、なんとなく注目が解除される。ラムダぁ、感謝。
「そうそう、ラムダは覚悟しておいた方がいいと思うぜ。」
「やっぱり･･･。」
「言っておくが俺達は知らんからな。あの様子じゃかなぁり怒っていたから、自分でなんとかしろよ。」
「うへっ！俺、逃げよかな･･･。」
「どこに？」
「俺に分かるわきゃないだろ。」
　ラムダは天を仰いでふて腐れる。可哀想だとは思うけど、逆上したサーミンを宥めるのは、あたしもちょっとパスしたい。
「んじゃ、俺、みんなの所に戻るわ。レイコちゃん、じゃあね。」
「あ･･･。」
　遼さんはあたしにペンダントを返すと、現れた時と同じ唐突さで姿を消した。
「これってテレポーテーション？」
「あぁ、あれ？リン、ショウに聞かなかったのか？ゼウスの連中は、全員ああいう能力を持っているんだよ。俺だって持っているし、もちろんリンだって･･･。」
「あたしも？」
「この空間の特性でね、よその次元層から来た者は、みんな何らかの特殊能力を身に付けているんだ。」
　知らなかった･･･、みんな、肝心なことを教えてくれないんだもん。だけど、それでやっと分かったわ。そうよねぇ、いくらなんでも女の子に向かって、いきなり一緒に戦ってくれって言うなんておかしいとは思ったのよ。みんな、あたしが持っている筈の特殊能力に期待していたんだ。でも、あたし、そんな能力なんて知らないわよ。まったく、あるかないか分からないような能力なんかに過大な期待しないで欲しいわ。
「ねぇ、ラムダぁ、そうするってぇとお宅も何か特殊能力を持っているの？」
　あーあ、ほとんどさっき決心したことなんて忘れているわ。気が緩んだせいか、ついラムダに話しかけてしまったじゃないの。言ってしまってから、心の中でしまった！と思ったけど、もう口に出してしまった以上は遅い。でも、ラムダには気づかれなかったかな。

「俺か？俺に特殊能力って言ってもねぇ。なぁ、シグマ、そう言えば俺って何か能力を持っていたっけ？」
「持ってないの？」
「持ってないってことはないだろ。ただ、今はその必要がないから表に出ていないだけで、必要になりゃ自然と分かるようになるさ。もちろん、リンもね。」
　なぁんか分かったような分かんないような･･･。でも、まぁ、いいわ。ラムダは一人で納得したみたいだから、あたしも深く考えるのはよそ。
　桂木さんは一応の納得をしたあたし達を見てクスッと笑うと、再びヘルテミスを上昇させ始めた。ここに来て初めてあたしはジュールの街並みをゆっくりと眺めることが出来たんだけど、何て言ったらいいのか、まともな形を保っている建築物なんて一つもないじゃない。必ずどこかしら崩れているビルの群れが、次から次へと眼下を流れていく。
　やっぱ、さすがに戦闘機の方が断然速いわ。あの竹輪ミサイルのせいで遅れた分をあっという間に取り戻したみたい。さっきまで遠くに見えていた塔がもう目の前に迫っている。あたし達は慎重に塔の周辺を旋回して、すぐ近くに見えた広場にヘルテミスを着陸させた。
「さぁて、どう潜り込みますか。」
　ラムダは例の腕時計型の機械を使ってヘルテミスを消すと、目の前に高くそびえている塔を見上げて言った。
　白い壁が淡い青緑の空に突き刺さるようにどこまでも伸びている。その鮮やかなコントラストが、戦っているんだということと妙に合わない感じがする。あたしはそのままゆっくりと壁沿いに一周してみたけど、こうして歩いてみると思った以上に小さいことが分かる。
　しかし、この塔、入口がないじゃないの。これでいったいどうやって潜り込めと言うのよ。あたしはだんだんトリプタンという敵に対して、自分でも訳の分からない怒りを覚え始めていた。だいたいねぇ、こんな馬鹿みたいに高い塔に、どんな必然性があるというの。しかも、いくらなんでも入口がないっていうのは、どう考えてもこの塔にとって最大の欠陥としか思えない。
「なぁ、言っておくが、この塔は単なるザップの発着のための物で、トリプタン本体はこの地下にあるんだからな。」
　ラムダがまた偉そうに余計なことを言う。
　でも、まぁ言われてみればそうなのかとも思う。たしかに塔のてっぺんには穴が開いていた。じゃあ、あそこから侵入するの？でも、なんかおかしい。侵入しなきゃいけないのはトリプタン本体であって、ドラ焼円盤なんてどうでもいい筈。だとしたら、直接地下に行くっきゃないじゃない。
「ねぇ、ラムダぁ、その機械、地面を掘って進む乗り物は出ないの？」
「おいおい、本気で穴掘りやる気かよ。冗談じゃないぜ。」
「なによぉ、何が冗談じゃないのよ。」
　まったくぅ、そんな言い方しなくったっていいじゃないの。どうせあたしは無知ですからね。
「だがな･･･。」
　着陸してからずーっと辺りを探っていた桂木さんが意味ありげな顔つきで口を開いた。
「こんな妙な様子じゃ、ちょっと本気で考える必要があるな。」
「と言うと？」
「気にならないか？作戦では俺達がこんな所でのんびりできるようになんかなってなかった筈なんだがな。」
「そう言やぁ、トリプタンの守りがいくらなんでもミサイル四機でおしまいってぇのも変だな。まさか･･･。」
「そのまさかだとしたら？」
　うーん、見事なまでに話しが見えない。完全なのけ者気分。
「や、やばいよ。そりゃあ、この作戦はトリプタンがこの点に気がついてしまったら、全然使い物にならないんだぜぇ。」
「どうする？オペレーション・ラムダ・バリエーションⅡ。決定権はおまえにあるが。」
「あぁ･･･。」

　なぁにぃ、バリエーションⅡ？そんなのがあるなんてジンくんは言ってなかったわよぉ。どうなってんのよ、もう。
「いや、ここから先の決定権はお宅のほうだろ。悪いが全面的に任すよ。」
「そうか･･･、そうだな。よし、じゃあ奥の手を使いますか。ラムダ、準備はいいか？」
「了解。いつでもどうぞ。俺がこの子を連れて行くから、シグマが先に飛んでくれ。」
うん、もう、頭にきた。こうまで完璧に無視されるってあんまりじゃない。
「ちょっとぉ、これじゃあたしにはさっぱり分かんないわよ。いったいどういうことなんだか説明して頂戴。」
　二人は一瞬顔を見合わせて、桂木さんがすまなそうに言った。
「悪いが今ゆっくり説明しているだけの時間はないんだ。早くしないとアトリー達が危ないかもしれない。
　ぐっ、こういう風に言われてしまっては、もうこれ以上何もいうことができないじゃない。はいはい、あたしは黙っていますよ。どうせ、あたしはおまけなんでしょうからね。
　桂木さんは軽くあたしの頭を撫でると、上着の内ポケットに手を入れて、そのままスーッと姿を消した。ラムダも強引にあたしの手を取ると、腕時計型の機械を操作する。
　次の瞬間、あたしの身体はラムダに抱きすくめられた。
　何すんのよぉ！そう叫ぼうとした時、周りの風景が一瞬のうちに歪んだ。不思議な空間、すべての空間が目の前に拡がっていて、すべてがごちゃまぜになって歪んでいる。ラムダの腕を振りほどこうとした筈のあたしは、情けないことに逆にラムダにしがみついていた。それでもラムダは力強くあたしのことを支えて、その変な空間の中を突き進んで行く。
　この空間の中にも不気味な姿をした生物がいて、怯えたような瞳で遠巻きにあたし達を眺めている。あたしには、その生物達の抱いている様々な感情が、なぜかしら理解することができた。
　そして、その中にはラムダの感情も･･･。
　深い、どこまで降りて行ってもまだ底が見えないような深い哀しみ。その哀しみの上っ面に乗っかっている明るさ。その明るさを支えているのが勇気。そしてラムダの本質にあるもの、それは優しさ。
　嫌だ、あたし、見たくない。これはラムダの心だ。あたしが見てはいけない。でも何故？どうして見てはいけないの？見てはいけない物を見ている訳じゃない。見たくて見ているのでもない。見えてしまうんだ。見るべきなんだ。じゃあ、見ればいい。ラムダの心を、本当のラムダの姿を･･･。
「おい、大丈夫か？」
　誰かに揺り起こされた。目を開くと桂木さんとラムダの顔が見えた。もう不思議な空間は抜けていた。
「桂木さん･･･、ラムダ･･･。」
　暫くの間、あたしは自分に何が起きたのかまったく分からなかった。ただ、桂木さん達の肩越しに巨大なコンピューターパネルが赤や黄色に点滅しているのを見て、自分が今どこにいるのかを辛うじて確認することができた。
「ここ･･･、トリ･･･プ･･･タン？」
　あたしの問いかけに応えるかのように、中央の一番高い所にある透明なカプセルが光りだした。
　その瞬間、すべての細胞が、あたしの中にあるすべての細胞が活性化し始めた。あのカプセルが危険であることを教えてくれる。
「ようこそ、諸君。我がジュールの首都トリプトによく来てくれた。心からの歓迎をするよ。」
　とっても気分の悪い声。電子音が作り出すまるで感情のこもらない抑揚のない声。
「そいつは光栄だな。しかし、歓迎してくる割りには出迎えが少ぉしばかり寂しかったようだが。」
「それは失礼した、五色川潤くん。いや、ジュールでの呼び名に従って、シグマと呼んだ方がいいのかな。」
　トリプタンは薄気味悪いほどのライトを点滅させて笑った。
「勝手にしろ。それより、アリンⅡの方はどうなったんだ？」

「五年ぶりだというのにそんなに会話を急ぐこともあるまい。まぁ、ゆっくりと話しでもするとしようじゃないか。」
「もう一度だけ言う。アリンⅡはどうなったんだ。答えろ、トリプタン。」
　比較的広いこの地下のフロアに、桂木さんの声が響き渡る。だけど、トリプタンはすぐに反応しなかった。一瞬の沈黙の後、再び笑い出した。
「フッ、フッ、フッ･･･、君はせっかちな男だ。まぁ、いい、君とは長い付き合いだ、特別に教えてやるとしよう。アリンⅡは無傷だよ。あんなフェリア人の武器で破壊されるほどステーションは脆くはないのでな。まぁ、もっともフェリア人どもも無事だったのは残念だったが。」
「フーッ･･･。」
　途端にあたしの傍にいたラムダから安堵のため息が聞こえる。
「知っていたのか？」
「私に分からないものなど何もないということは、君の方がよく知っているのはないのかね？」
「あぁ、そうだったかもな。だがな、おまえを造ったのは俺じゃないし、そんなことは知らなかったね。」
　なぁに、さっきから聞いていると、まるで桂木さんとトリプタンが知り合いみたい。どうして？だいたい、五色川潤って桂木さんのこと？桂木さんって地球人じゃなかったの？
　それに他にもおかしいところがある。桂木さんの態度。トリプタンと対峙した時から、桂木さん自身に変化が生じたような気がするの。少なくとも今あたしの目の前にいる桂木さんは、地球にいた時の桂木さんじゃないわ。
　まるで追い詰められた鼠が逆に猫を襲おうとしているかのような･･･。今の桂木さんを支えているのは、トリプタンに対する恐怖？それとも他に･･･？
「トリプタン、俺には一つだけどうしても聞きたいことがある。」
「ほう、何かね？」
「おまえのその擬似感情だ。おまえが擬似感情を持ってしまったのは、五色川のせいなのか？」
「偶然･･･、いや人間的に言わせてもらうなら神の気まぐれという奴だろうな。しかし、それを知ってどうしようというのかね？」
「そうか･･･、いや、何でもないさ。これで思いっきり戦うことができるってことだ。」
「君一人で何ができるというのだ。」
「なぁに、なんとかなるもんだよ。それが人間っていうもんさ。まぁ、おまえに言ったところで理解できる筈もないだろうが。」
「君達が何人束になって向かってきたところで、私に敵う訳はないのだ。もし、私を倒すことのできる人間がいるとすれば、それはただ一人、五色川満秋、つまり私の生みの親だけなのだ。」
　トリプタンの言葉が途切れた瞬間、色鮮やかに点滅していたコンピューターパネルが、いきなり全面真っ赤に変わった。さっきまで点滅した中にも赤はあったけど、今の赤はそれとは違う赤。そう、言うなれば殺意の赤。
　桂木さんが、ラムダが、そしてあたしが、トリプタンに対して身構える。と同時に降り注ぐ鋭い熱線。咄嗟に伏せた桂木さんの肩にそのうちの一つが矢のように突き刺さる。
「桂木さん！」
「ラムダ、リンを連れて速く逃げろ。」
　桂木さんは熱線の死角になる方へと少しずつ移動している。
「早くしろ！」
　自分が負傷したっていうのに、あたしを守ろうとしているんだ。桂木さん、やっぱりあなたは桂木さんなのよ。あたしとラムダは、注意して熱線攻撃をかわしながら、桂木さんのところへ走った。
「今のうちに基地の外へ脱出するんだ。」
「お宅は、お宅はどうするんだ？」
「俺は残るよ。これは俺とトリプタンとの戦いなんだ。俺の能力でどこまで戦えるか分からんがね。」
「そりゃ無理だろ。お宅はテレパスなんだぜ、どうやって戦おうってんだ。これじゃあまるで死ぬようなもんだ。」

　死ぬ？桂木さんが？
「俺にだって誓ーほどではないが念動力が使える。」
「ミサイル一つ落とせない程度の？」
　桂木さんがキッとラムダを睨みつける。その瞳、あたしには鋭さがまったく感じられない。桂木さん、おそらくは死ぬ気だ。初めっからそのつもりでトリプタンに乗り込んだんだ。あたしが変に感じたのもきっとそのせいだわ。
　だとしたら、あたし･･･。
「ラムダ、おまえこそ何の能力も持ってないんだ。今のうちにサッサと脱出しろ。」
「シグマ･･･。」
「桂木さん！」
　バシィーン！
　うわぁ、反射的に桂木さんの顔をぶっ叩いてしまったわ。
「桂木さんとトリプタンとの間にどんな関係があるかなんて、そんなこと、あたしは知らない。でも、少なくてもこれだけは言えるわ。トリプタンとの戦いは、もう桂木さん個人の問題じゃなくなっているってこと。一人で戦おうなんて思いあがりもいいところよ。」
　ほとんど自分で何を言っているのか分かっていない。嫌だ、みっともない。
　こうしている間にもトリプタンの攻撃は一段と激しくなってきていて、あたし達が盾にしている場所もかなり危なくなってきた。
「俺もこの子の意見と同じだよ。俺だって、アトリー達だって、みんなそれぞれの想いを抱えて戦っているんだぜ。」
「それでも、みんは桂木さんのことを頼りにしているわ。だけど、それは今の桂木さんじゃないわ。死のうとしている人間を誰も信頼はしない。あたし、こんな桂木さんを見たくはなかった。」
「ラムダ･･･、リン･･･。」
　もう限界、盾にしていた物がとうとう破壊されてしまった。三人とも転がるようにして次の物陰に駆け込む。
「それにな、一人で恰好つけるにゃ、ちょいとばかり遅かったようだぜ。」
　あたし、桂木さんを見つめる。
　ラムダも桂木さんを見ている。
　桂木さんの瞳、少しずつ、少しずつ、あたし達の顔を正面から捉える。そして、瞳に鋭さが戻ってくる。いつもの桂木さんが戻ってくる。
「畜生･･･。」
「えっ？」
　あたしとラムダ、同時に聞き返した。
「畜生！やっぱり連れてくるんじゃなかった。最後かもしれないチャンスがパァになったな。だが･･･、やっぱり･･･。
「えっ？」
　桂木さん、急に向こうを向いてしまって、最後の言葉が聞き取れない。
「やっぱり･･･？なんだっていうの？」
　そろそろ今の場所も危うくなってきたわ。早くしないと冗談抜きで三人とも死んでしまう。あたしが桂木さんの肩に手をかけようとした瞬間、桂木さんはクルッとこっちに振り向いた。
「二人ともありがとう。」
　そして、照れたような笑顔であたしの頭をクシャッと撫でる。あたしとラムダは訳が分からず、キョトンと桂木さんを見つめた。
「なんて顔をしているんだよ。ほら、脱出するぞ。」
「う、うん。」
　桂木さんは途端に真顔になって、いつもの頼りがいのある桂木さんに戻っていた。
「さぁて、ラムダ、リムタイマーをいくつ持っている？」
「あ、あぁ、手元に七つある。あとはバニース銃が一丁ってとこだが。」

「銃は必要ない。リムタイマーをセットしたら脱出だ。フェリアまで一気に転移するから、リンは俺にくっついていろよ。じゃ、ラムダは向こう側を頼む。
「了解。じゃ、お互いに無事でな。」
　ラムダはリムタイマーと呼んだ代物を四つ桂木さんに渡すと、右手の人差し指を立ててウインクしてから、熱線の合間を縫うようにして少しずつ移動し始めた。
　あたし達はその場で最初の一つ目をセットすると、トリプタンの死角から死角へと走ってリムタイマーをセットしていった。三つ目をセットし終えると、ラムダから全部セットし終わったという合図がきた。桂木さんはラムダを先に転移させると、一つ残っているリムタイマーを掴んでいきなり立ち上がった。
「トリプタン！勝負は預けておくからな。」
「ハッ、ハッ、ハッ･･･、よかろう、次の再開を楽しみにしているぞ。」
　不気味にトリプタンの笑い声が響く中、桂木さんは最後のリムタイマーをトリプタンのカプセル目がけて投げつけた。
　それと同時に身体がフワッと浮き上がったような感じがして転移の時の妙な感覚に襲われる。訳の分からない幾何学模様の渦が、あたしの身体をジリジリと締め付ける。そして、突然後ろから引っ張られる感じがして、桂木さんから離れてしまった。
　ホワイトアウト、そんな表現が一番似合いそうなほど周りは白一色の世界。目を開けているのも辛い。不思議なことに、この光は光源がまったく感じられない。なんて言ったらいいのか、おの空間全体が発光しているみたいなの。
　だんだんと目を慣らしていくと少しずつだけど何かが見えるような気がしてくる。あまり明るくない部分と真っ白な部分があることに気づく。すると、急に周りの物が見えてきた。それは目が慣れてきたんじゃなくて、周りの明度が落ちてきて色相が広がってきたせいなんだけど、その中で何かが動いているのが分かる。
　それは少しずつあたしの方に近づいてきて、だんだんとぼんやりとした輪郭が分かるようになって、そしてそれはあたしになった。
「ん、久しぶりぃ。どうやら、まだ例の切り札は使ってないみたいね。」
　にこやかな笑顔で近づいてきたもう一人のあたし･･･。あたしにそっくりで、あたしより美人の。
「使ってないって言われてもねぇ。あたし、あの切り札が何なのか知らないもの。それより、あなたが現れたってことは、今度こそ情報をくれるんでしょ？」
「そりゃあ、まぁ･･･。」
　口の中でモグモグと言葉を濁して、かなり言いにくそうなことだけはよく分かった。だけど、あなたがあたしの想っていることが分かるように、今のあたしにはあなたの考えていることが分かるみたいなのよねぇ。
「分かっているわよ。本来なら自分で目覚めなければいけないんだろうけどね。でも、早く決着をつけたいんでしょ。迷っている場合じゃないんじゃない？」
　さすがに驚いた顔をしているわ。あたしって本当にすぐ顔に出るんだ。ちょっと複雑だけど、この鈴子さんを見ているとつくづく納得するしかない。目を大きく見開いて、肩をちょっと上げて、おそらくあたしも驚いている時って同じ顔をしてんだろうなぁ。
「あたしの言いたいこと分かる･･･の？」
「あたしはあなた、そう言ったのはそっちじゃない。」
「だけど、どうして、こんな短時間で強い能力が･･･。でも、こうなったら早い方がいいかもしれないわね。レイコ、あたしの想い、すべて受け取ってもらうわよ。」
　そう言うなりいきなり抱きついてくると、顔が間近に迫ってきてアッと思う間もなくキスされてしまった。身動きが取れない、鈴子の唇があたしの唇をしっかりと押さえてて、そこから不思議な力が流れ込んでくる。
「ん、んん･･･、んな、何をするのよ。」
「驚かして悪かったわ。でも、これであたしの任務は終わり。」
「終わりって、それどういう意味？」
「もう全部分かる筈よ。」
「えっ？あ･･･。」

「ねっ！それじゃ、フェリアのこと、頼んだからね。」
　軽くウインクをして振り返った後姿が、フワーッと白色に溶けていく。
「鈴子！」
　だけど、あたしは追いかけなかった。ううん、追う必要がなかった。だって、本当にすべてを理解することができたから。あたしは自分が何をしたらいいのかやっと分かった。もう迷わない。
　鈴子、あなたのメッセージ、たしかに受け取ったよ。
「あ、り、が、と･･･。」
　彼女の姿が完全に消えると、周りの白い光が次第に暗くなって、やがては完全な闇に、そして幾何学模様の渦が再び襲ってきた。でも、道は分かっている。あたしはあたしが取るべき道を進めばいい。
　そして、あたしは帰って来た。フェリアの見慣れた基地の前に。

ＡＣＴⅤ　「TRIPTAN」

S60.12.MAY <<H19.28.DEC>>

ＡＣＴⅥ　「MEMORIES」

　あたしがオペレーションルームに入っていくと、ラムダやアトリー達、みんなの元気そうな顔が一斉にあたしのことを見た。
「レイコちゃん！」
　うわぁって感じでみんなが集まってくる。
「うん、ごめんね、心配かけちゃって。」
「その台詞はシグマに言ってやんな。あいつ、パニックを起こしかけているみたいだったからさ。」
「桂木さんが？」
「多分、レーダールームにいるんじゃないかな？」
「うん、行ってみる。」
　みんな、それぞれ頷いて自分の持ち場に戻っていく。ただ一人、ラムダだけが変なニヤニヤ笑いを顔にのせて、あたしの前に残っていた。
「なぁに？」
「いや･･･。」
　一瞬、視線が上へ下へと散らばって、再びニヤッと笑うと、あたしの頭をクシャッと撫でた。
「シグマの所に行くか。」
「なン･･･。」
　ラムダは無理やりあたしの腕を掴むと、呆気に取られているあたしを引きずってオペレーションルームを出た。
「ちょっとぉ、そんなに引っ張んなくたって自分で歩けるわよ。」
「ん、悪い･･･。」
　ふーん、意外と素直に手を離したわね。
「珍しいわね、いったいどうしたって訳？」
「俺のすべきことってぇのが見つからなくってさ、ちょっとあそこに居づらかったんだ。」
　ペロッと舌を出して･･･。へぇ、こういうラムダって初めて見たわ。でもねぇ、ラムダが照れているってのが、なんとはなしに伝わってくるんだ。少しはラムダのこと、見直せるかな？
「ラムダぁ、やっぱりお宅って可愛いわ。」
「なんだよ、それ。」
「別にぃ。」
「なに莫迦なこと言ってんだよ。ほら、着いたぜ、早く安心させてやんな。」
「うん。」
　レーダルームのドアの前で、またもやあたしの頭をクシャッと撫でて、視線でドアを示す。まったく、そう度々人の頭をクシャクシャにするのやめて欲しいもんだわ。
　あたしがレーダールームのドアをそーっと開けて、中を覗き込もうとした途端。
「リン！リン！無事だったんだ、無事だったんだな。」
　桂木さんがいきなり抱きついてきて、もう半分以上錯乱していることが言われなくてもよく分かる。
「ちょっとぉ、そんなに迫ってこなくたって、あたしは大丈夫だってばぁ。」
　んもう、みっともないったらありゃしない。いつも冷静で頼りがいがある分、こうやって一回崩れてしまうと見ていらんないわ。
「そう言うもんじゃないぜ。これでも落ち着いたほうなんだから。」
　ニヤッと笑って、あたしに抱きついている桂木さんを見る。
「でもさぁ、俺、ようやく分かったよ。」
「何が？」
「シグマの弱点さ。まさか、それがお宅だったとはね。」
　喉の奥のほうで押し殺した笑い。その笑い声とともに桂木さんの顔が徐々に真っ赤になっていく。どうやら、やっと正気に戻ってきたみたい。

「ラムダぁ･･･、おまえ余計なことをべらべらと喋りやがってぇ･･･。」
「あれっ、怒った？」
「おまえだって知っているだろうが、転移中の事故がどんな結果を招くか。生きて帰れたのが不思議なくらいなんだ。リンにもしものことがあったら･･･。」
　そこまで言っておいて、自分が何を話しているか急に気がついたみたい。ドンドン声が小さくなって、途中から何を言っているのか聞こえなくなっちゃった。まぁ、何を言いたいのかは、べつに聞かなくたって気づいていたけど、こう面と言われるとねぇ･･･。
　あぁ、これが地球だったら素直に喜ぶんだろうけどなぁ。だけど、もし地球に無事に帰ったらさ、この埋め合わせはきっとするから、今は気づかないふりをするけどごめんね。
「桂木さん、アトリー達は桂木さんが来るのを待っているんだよ。そろそろ行ってあげないと･･･。」
「ん、あぁ、そうだな･･･。」
　桂木さんはようやくあたしの身体から手を離すと、なんか微妙な薄ら笑いを浮かべて、そしてゆっくりといつもの表情に戻った。うん、やっぱり、桂木さんはその方がらしいと思うよ。
　とりあえず、桂木さんを急かしてあたし達はオペレーションルームに戻った。結局、アトリー達のほうも全員無事で、無理やりザップに突っ込んだユーリと、トリプタンの熱線を肩に受けた桂木さん以外にはこれと言って怪我もなくみんな元気だった。
　もっとも、ユーリは包帯だらけのわりに人並み以上に元気が余っているようだけどね。
　アトリーは桂木さんが落ち着いたのを確認して、さっそく全員の手を休めて会議を行うと宣言した。さすがに 13 人もの人が入るとここも狭く感じる。だけど、それは仕方がないわね。隣の部屋からも椅子を持ってきて、それでも桂木さんやハリーなどは壁に寄りかかって立っていた。
「それじゃ、そろそろ始めるか。」
　アトリーはグルッと周囲を見回してみんが落ち着いたのを確認してからそう言った。
「今回のラムダ計画は残念ながら失敗に終わってしまったが、まぁみんな大した怪我もなく良かったよ。」
　あの時、桂木さんのテレパシーを尾田さんが受けて、アトリー達はすんでのところでアリンⅡには突っ込まなかったらしいの。
「アトリー、俺ぁ、大した怪我をしたんだがな。」
「うるさい。おまえのは命令違反の自業自得だろうが、命があるだけ良かったと思え。」
「ちぇっ、これだかんな。」
　他の人達はみんな笑いを噛み殺して二人のやり取りを見ている。だけど、みんなは知っているんだ。本当にあの時危なかったのはジェニーのほうで、ユーリはジェニーを助けるためにわざと円盤に体当たりをしたんだって。でも、そんなことを一言も言わないユーリに、みんなはわざと知らないふりをしていた。
「で、その後のトリプタンなんだが･･･。」
　まだブツブツ文句を言っているユーリを無視して、アトリーは話しを先に進めるつもりらしい。
「こちらのレーダーで確認したところでは、どうやらジュールを離脱したらしいんだ。現在、アリンⅣ、アリンⅤと合体して、ジュールの衛星軌道上をゆっくりと回っている。おそらく、向こうもそろそろ決着をつける気でいるんだろう。シグマ、どう思う？」
「決着をつける気だったら、とっくにジュールでやっている筈だろ？」
　腕組をしたまま他の人達の顔を見回す。
「逃げるって可能性はないのかい？」
「いや、それはないだろう。それだけの理由もなければ、行く先もない。」
　尾田さんの意見を桂木さんはピシャッとはねつけた。
「それやったら、ここへ来る気やないの？ジュールを捨ててフェリアに来るだけの理由は分からんけど。」
「ジュールを捨てて･･･？」
　サーミンの言葉に桂木さんは何かを掴んだらしい。みんな、桂木さんの次の言葉を待った。桂木さんは暫く考え込んで、それから不意に端末機の前に移動するとラオコーンにいくつか質問をし出した。あたし達はすべきこともなく、ただジーッと桂木さんの動きに注目していた。

「俺の思い過ごしならいいんだが･･･。」
「シグマ、そろそろ説明してくれん？あたしらにはさっぱり･･･。」
「ん、悪い。でも、まだラオコーンの回答が出ていない。それよりも話しを元に戻そう。」
　ん、なんか強引に話しを変えようとしたわね。ということは、桂木さん、何かに気がついたんだ。
「トリプタンがこのままフェリアに来たとして、戦力的に俺達には勝ち目があるのか？」
「そんなん、やってみなきゃ分かんないやないの。」
　あれ？みんな、話しが逸れたの気にならないのかな？
「俺達の戦力は、アルテミス四機、フェイテス、スラッグ、シューザー、こんなところだろうな。」
「アトリー、ゼウスを忘れてもらっちゃあ困る。俺達の最大戦力なんだからね。」
「あ、あぁ、そうだったな。それにしてもこれだけでどこまで戦えるか･･･。」
　場の雰囲気が重苦しい。ラオコーンが何かを計算する音だけがシーンとしたオペレーションルームに響いている。
　どうして？どうして誰もさっき桂木さんが言いかけたことを確認しないんだろう。問題はトリプタンがフェリアに来ることなんかじゃなく、ジュールを捨てようとしているかもしれないこと。
「とにかく相手の出方が分からないことにはな。」
　桂木さんの言葉で、みんなは反射的に顔を上げた。
「偵察に行くかい？」
「リョウ！」
「そうだな、このままラオコーンの回答を待っているより、その方が建設的ではあるな。」
　みんな、アトリーにつられるように頷いた。
「よし、リョウ、悪いがアルテミスでジュールまで行ってくれ。」
「それなら俺も行くよ。二人の方が何かあった時にいいだろう。」
「誓ー･･･、だが二人とも十分に気をつけてくれよ。」
　尾田さんの指示で二人は立ちあがる。
「あぁ、分かってるよ。」
　二人が出ていってしまうと、誰も気がつかなかったみたいだけど、桂木さんは妙な笑い方をしながらアトリーに言った。
「アトリー、みんなを休ませてやってくれ。どうせ正確な情報が入らないことには、こっちの動きようはない訳だからな。」
「あ、あぁ、そうだな。みんな、各自自由に休んでくれ。それから、サーミン、すまないがビュレットの相手をしてやってくれないか。最近かまってやれなくてね。」
「ん、うん、任せとき。」
　それぞれなんとなくオペレーションルームから出て行く。桂木さんだけがラオコーンからの回答を待つために残った。あたしは、桂木さんにさっきのことを問い詰めたくて、みんなと一緒に一度はオペレーションルームを出たものの、なんとなく廊下に出たところで動けなくなった。
　そーっと、オペレーションルームのドアまで戻ってくると、部屋の中から話し声が聞こえてくる。かなりの大声で、話し合いというよりはまるで喧嘩しているかのよう。どうやら、尾田さんが桂木さんに抗議しているみたいだった。
　あたしは見つからないようにスクリーンの裏側に回ると、そこで二人のやり取りを聞くことにした。
「とにかく、僕はあんなやり方には反対です。あなたが言わないなら、僕が代わりに言います。」
「ちょっと落ち着け。いいか、なにも悪戯にあいつらを動揺させることはないだろ。時期が来たら俺からきちんと話す。だから･･･。」
「それでは遅いんです。今です。今、彼らが自力でこの壁を乗り越えなきゃいけないんです。
　いったい何のことを言っているのかしら？桂木さん、あたし達に何を隠しているの？
「ん、誰だ？隠れてないで出てきたらどうだ。」

　見つかった！？桂木さんがテレパスだってことを忘れてた。でも、どうやら見つかったのはあたしじゃないらしい。スクリーンの裏側から出て行こうと迷った瞬間、ラムダの声が聞こえてきた。
「べつに立ち聞きするつもりじゃなかったんだけどさ、マインドコントロール、あまり気持ちのいいもんじゃないんでね。」
　マインドコントロール。ラムダのその一言ですべてが分かった。桂木さんは微弱とはテレパスだから、マインドコントロールでアトリー達をある事実から遠ざけた。でも、それはいったい何のため？まだ疑問は残っている。
「ラムダ、おまえ･･･。」
「悪かったな、期待に添えなくて。聞かせてもらうぜ、お宅がいったい何に気がついたのか？ラオコーンは何て答えたんだ？」
「あぁ、仕方がないな･･･。」
　桂木さんは少し間を置いて、そしてゆっくりと話し始めた。
「トリプタンの目的、奴はジュールを浮遊惑星にするつもりなんだと、俺はずーっとそう思っていた。しかし、現在の、いや、今までの奴の動きを見ていると、不審な点がいくつか出てくる。で、俺は分からなくなっていたんだ、いったい奴の本当の目的は何なのか。」
「そこへあのサーミンの言葉がヒントになったのか。」
「そうだ、フェリアに来る理由、奴にそんな理由があるとすれば何なんだろうか、それを考えた時に俺はすべての謎が解けたような気がしたんだ。」
「それをラオコーンに確認した訳か。」
「あぁ、その結果、導き出された結論、つまりトリプタンの本当の目的は･･･。」
「フェリアか？」
「ラムダ･･･。」
「お宅がアトリー達に隠そうとする理由はそれしかあるまい。」
「同じ質量、同じ保持エネルギー、同じ形状、普通ならそんな惑星は二つとある筈がない。だが、ジュールとフェリア、この二つの惑星ならピッタリと当てはまる。ラオコーンは99%という回答率を提示してきている。」
　この位置からは三人の姿は見えないけど、なんとなく三人がどんな表情をしているのか、あたしには分かるような気がする。たしかに、アトリー達に隠そうとした桂木さんの気持ちも分かるし、だからこそ話すべきと言った尾田さんの気持ちも分かる。あたしはラムダが何と言うのか、次の言葉を待った。
「で、なんで隠しておく必要があるんだ？」
「えっ？なんでって･･･。」
「そんなもんで落ち込むようじゃあ、初めっからジュールに平和を取り戻すなんて無理なんだよ。」
「だが･･･。」
「シグマの気持ちも分かるけどさ、ジュールかフェリアかなんて誰もそんなことを気になんかしてないだろ。どっちも大事なんじゃないのか？」
　あたしはそーっとオペレーションルームを抜け出た。ちょっとだけホッとした。桂木さんにもいい友人がいてくれたことに。おそらく、桂木さんはこの先変わるだろう。もちろん、いい方向にね。だから、あたしは黙って待ってみようと思う。桂木さんのほうからあたしにすべてを話してくれるまで。
　そうするとぉ、あたしはべつにすることがある訳じゃないし、突然暇になってしまってちょっと困ってしまう。何も考えずにオペレーションルームを出てきちゃったんだけど、よく考えたらここを一人で歩くのって初めてだったりする。
　でも、まぁ、いいでしょ。あたしとしちゃあ、これから暫く厄介にならなきゃいけないことが分かったんだから、ここをちゃんと覚えるにはいい機会かもしれないし、楽天家を気取ってみても面白いかもしれない。
　あたしは誰か近くにいないか精神を集中してみた。そのままゆっくりと身体を回転させる。まだ、やり方を掴んでいないせいもあって、ぼんやりとしか分からない。うん･･･、サーミンかな？

サーミンの他は？暫く捜してみたけど駄目ね、サーミンしか感じることができない。なんとなくガッカリしたのとホッとした気持ちが半分半分。まぁ、あたしの実力なんてこんなもんでしょ。
　あたしは一番近いフリールーム、ナンバー２と書いているドアをノックした。
「はぁい、サーミンいる？」
「ん、レイコ、どうしたん？」
　えっ、ウィリーくんも一緒？
　サーミンの足元にのんびりと横になっているウィリーくんがいる。でも、あたしはさっきウィリーくんの存在を感じることができなかった。サーミン一人だと思ってこの部屋のドアを開けたのに･･･。
「なんか用でもあるんか？」
　なんか変だなぁ、サーミンの言い方がやけに刺々しい。
「べつにね、用って訳でもないんだけど･･･。あのぉ、ひょっとして、サーミン、怒ってる？」
　サーミンの身体から怒りのエネルギーが発散されているのが見えてしまう。だからなんだと言う訳じゃないんでしょうけど、思わずあとずさってしまったじゃない。
「まぁ、そう逃げんでもええやろ。こっちへ座り。」
　あぁ、駄目だ、あの瞳。下手に逆らったらどうなるか分からない。あたしはできるだけ一番愛想のいい笑顔で、サーミンの向かい側に座った。
「レイコ、あんた、シグマと知り合いやったんてな。」
「うん･･･、アパートの隣同士。」
　サーミンは不意に立ち上がって、部屋の中を歩き始めた。
「あたしはさ、シグマが何をしたかてべつに反対する気はないんよ。まぁ、反対できる立場でもないしね。」
　ウィリーくんがちょっと迷惑そうにモソモソと邪魔にならない場所に移動した。
「もし、レイコも気づいておったんなら、あたしは止めさせたほうがええと思うよ。」
「もし、気づいていないんだったら？」
　サーミンも桂木さんがマインドコントロールでアトリー達を操っていたこと、やっぱり気づいていたんだ。
「そんなら、しゃあないけど。」
　ドサッと身体を投げ出すようにソファに座る。あたしは慌てて気分を変えようと、わざと明るい声を出した。
「あー、そうだ。ラムダが心配してたわよ、サーミンに怒られるんじゃないかって。」
「当たり前や、すっかりと忘れとったわ。よぉし、あとでしっかりとお仕置きしたるわ。」
　あーらら、あたし、余計なことを言っちゃったみたい。まぁ、ラムダなら適当に逃げてくれるでしょ。
「なぁんて、大丈夫、冗談やて。」
　あたしが困った顔をしたのを見て、サーミン、ようやく笑ってくれた。
「ところでさ、ちょと訊きたいことあるんやけどな。あんた、前にショウとも知り合いやったって言うたやろ。」
「うん。」
「このあいだな、リョウが同じようなこと言うてたんよ。もしかしたら、あんたと前に会ったことあるかもしれんてな。」
「リョウさんが？」
　あたし、自分の記憶を探ってみるけど、前島遼なんて名前に出会った記憶がない。
「それ、いつ頃のことか分かる？」
「リョウが小学校の頃って言うてたけど･･･。」
　うーん、それじゃ余計に分からない。
「あたし、小学校の三年生まで奈良にいたのよ。で、その後千葉に引っ越してきてから、いったいどっちの小学校のことなのか･･･。」
「レイコ、奈良って･･･。奈良のどの辺にいたん？」
「え？えーっと、天理市の長滝っていう所だけど。」

「なんやてぇ！」
　長滝って地名を聞いた途端のサーミンの迫力に、思わず一瞬身を伏せてしまった。」
「ええか、よぉく聞くんよ。あたしも幼稚園の時までは天理市の長滝にいたんよ。」
「えぇーっ！？」
　今度は私が叫ぶ番。えーっと、頭がちょっと混乱してきた。なんでリョウさんがあたしのことを知っていて、あたしとサーミンは同じ町に住んでいて･･･。
「サーミン、ちょっとごめんね。」
　サーミンにゃ悪いと思ったけど、こうも訳の分からないことが重なり合うとちょっと偶然とは思えない。サーミンの記憶をサーチさせてもらった。
「レイコ、なん･･･。」
　サーミンの額に手をかざす。ほどなくしてサーミンと波長が合った。記憶の底へ降りていく。高校、中学校、小学校、そして幼稚園。
「サーミン！あなた、百合平幼稚園のさくら組だったのぉ？」
「あんた、いつの間にそんな能力を･･･。プライバシーの侵害やで。」
「ごめん、でも非常事態なの。それより思い出してよ、そのさくら組に髪の毛をいつも肩くらいに伸ばしていて、いつも絵本を持っていた女の子がいたのを。」
「そんなことを言うたかて、なんせ 19 年も昔のことやし。それに、その後すぐに大阪の方に引っ越したさかい、長滝のことはよう覚えてないんよ。」
「でも大事なことなの。ほらぁ、近所に川があってさぁ。その子が落ちたのを、サーミンが助けたじゃない。」
　うぅ、もう少しでたどり着くんだけど、こればっかりは何も出助けができない。サーミンには自力で思い出してもらわないと。
「川ねぇ･･･、あたしが･･･、幼稚園の頃やろ･･･。あーっ、そうや、あのヒロシの奴が突き飛ばして･･･、で、あたしが助けて、あたしん家の隣に住んどって、名前は･･･、名前はレーコちゃん。」
　サーミン、自分で思い出してまさかって顔をしている。まぁ、無理もないわね。あたしだって信じられないもん。ましてやテレパスでないサーミンの混乱たるや･･･。もうパニック寸前。
「ちょっと待ってや。そうするとぉ、あんたがあの時のレーコちゃんな訳？」
「うん、まぁ、そういうことになるわね。」
「あたし、よう分からんようになった。」
　頭を抱え込むような仕草で、首を振ってみせる。
「いい、順番に説明するわ。最初にあたしと尾田さんは高校の時の知り合いだったことが分かっていた。で、サーミンは幼稚園の時。そして、リョウさんとも小学校で会っているのよ。ここまでいい？」
　サーミンは微かに頷く。
「サーミンの場合、あたし、尾田さん、リョウさん、誓一さん、この四人とすべて前もって会ったことがある。そうでしょ？」
　サーミンはまた頷いた。
「じゃあ、小田さん達はどうなのかしら。会ったことがあるのか、それともないのか。」
「会ったことも何も、あの三人、小さい頃は一緒に住んどったって、たしかそう聞いたわ。」
　揃ってしまった。一人ぐらいなら偶然でも済ませられるだろう。まぁ、二人ぐらいでもなんとか偶然ということにしてもいいわよ。でも、五人もいて、それがお互いに自分の人生の中でどかに接点があるなんて、これはちょっと異常事態と言っていいと思う。これが東京にみんな住んでいて、東京でバッタリ出会った程度のことなら、あたしだってこうグチャグチャ言うつもりはないわよ。でも、ここは地球から遠く離れたフェリアなのよ。
　誰かが故意にあたし達をフェリアに連れてきた。そうとしか考えられない。ううん、そう考える方が自然なんだわ。そして、それができるのは･･･。
「サーミン、あたし、決めたわ。」
「は？決めたって何を？」

「訊きに行くのよ、あたし達をフェリアに来させた、その理由をね。なぜトリプタンと戦うのか、どうしてこうなってしまったのか･･･。」
　あたしはそう言いながら立ち上がった。
「せやけど、そんなん誰に訊くん？」
「コンピューター・ラオコーンよ。」
　サーミンに軽くウインクをして、そのまま部屋から飛び出した。サーミンの呼び止める声が背中に聞こえる。だけど行かなきゃならない。すべての事実を知っているのは、ラオコーン、あなただけに違いないのだから。
　なぁんて、格好よく飛び出したはいいんだけど、よぉく考えたら、あたし、コンピュータールームがどこにあるのか憶えていなかったんだ。何のためにサーミンの部屋に言ったんだろう。とは言ってもなぁ、今さらコンピュータールームの行き方を訊きに戻るのはアホらしいし･･･。えぇい、構うもんか、きっとそのうちたどり着くわよ。
　ところが運が悪いと言うべきか、単に方向音痴のせいなのか、なんとわたしがたどり着いた場所はアルテミスなんかがズラッと並んでいる格納庫。なんでなのよぉ、格納庫って言ったら普通は基地の一番外側にあるもんでしょ。コンピュータールームは逆に一番中央の部屋の筈。我ながら自分の方向感覚の無さには頭が痛くなる。どうしよ･･･。
「あれ、レイコさん、いったいどうしたんですか？」
　人の気配を感じた瞬間、一番手前のアルテミスの中からジンくんが顔だけヒョコッと出した。
「お、驚かさな･･･い･･･でよ。嫌だぁ、ジンくん、その顔･･･。」
「え？」
　顔だけのジンくん、その顔が油でまだら模様になっている。ここ汚れているもんねぇ。
「顔よ、拭いた方がいいわよ。」
　ポケットからハンカチを出すと、ジンくんに渡すゼスチャーをした。ジンくんは素早くアルテミスから出てくると、あたしの前に飛び降りてきて照れくさそうにニコッと笑った。
「何か僕に用事ですか？」
　あたしの差し出したハンカチで鼻の頭を拭きながら、ジンくんは不思議そうにそう尋ねる。
「べつにね、用事って訳でもないんだけど、ちょっと道に迷ったらここに･･･。」
「え、なんて言いました？」
「あ、いいの、いいの、気にしないで。それよりジンくんはここで何をしているの？」
　あはっ、ジンくん、聞いてなかったみたい。
「僕はアルテミスの整備を今のうちにやっちゃおうと思って。」
「あ、一機壊しちゃったんだっけ？」
「えぇ、でも、あれは僕の腕じゃ修理できませんよ。当分は使い物になりませんね。」
「ふーん･･･。」
　なぁんか気が抜けた。どっちかって言うと楽になったような気もするけど。
「そういえばユーリは？こういうのって彼がやるんじゃないの？」
「ユーリならメディカルルームです。さっきジェニーに引っ張っていかれたから。」
　ジンくん、そのまま床にベターッと座っちゃうと、持っていたスパナを工具箱にしまい始めた。
「でも怪我って大したことないんでしょ？」
　ちょっと迷って、結局あたしも床に座り込んだ。
「本人は強がっていましたけどね。本当はどこか骨折しているんじゃないかって。まぁ、ジェニーに任せておけば安心ですから。だから、せめて僕はユーリの代わりにアルテミスの整備くらいはやろうと思って。」
　ふーん、ユウに IQ240 だなんて言われたから、もっとガリガリの硬い頭してんのかって思っていたんだけど、そうでもないのね。
「ねぇ、レイコさん･･･。」
「なぁに？」
「いい機会だから、ちょっと訊きたいことがあるんですけど。」
　フッとジンくんの表情から笑顔が消えて、なんかこっちまでつられて真面目な顔になっちゃう。
「あ、嫌だなぁ、そんな深刻な顔をしないでください。大したことじゃないんだから。」

「ごめん、ごめん、ついつられちゃって。で、訊きたいことって？」
「えーっと、ちょっと訊き難いんですけど、レイコさん、シグマのこと、どう思っています？やっぱり、好き？」
「えーっ！何よ、急に。そりゃあ、好きだけどさぁ。嫌ぁねぇ、なんでそんなことを訊くのよ。」
　たはっ、よもやジンくんの口からこんな質問が出てくるとは思わなかった。ジンくんは暫くあたしのことを観察するように見ていて、やがて元の笑顔に戻った。
「まぁ、いいや。」
「何よぉ、はっきり言いなさいよ。」
「あなたなら、シグマの、いや、兄貴の相手として十分にやっていけそうだって話し。」
　え、えーっ、兄貴？
「な、なんで、いったいどういう意味？」
「深い意味なんてありませんよ。今言ったとおりです。」
　うぅ、ニコニコ顔のポーカーフェイスほど厄介なものはない気がする。まるであたしが驚くのを楽しんでいるみたい。こうなったら実力行使あるのみ。
「無駄ですよ、僕も一応はテレパスなんで、シールドする術は身に付けています。本当はできない方がどれだけ幸せだったか･･･。」
「ジンくん･･･。」
　顔の表情は相変わらず笑っているんだけど、ジンくん、どう見ても泣いているように見える。
「レイコさんも気づいたんでしょ、あの兄貴のやり方。」
「うん。」
「実を言うとさ、アトリー達、全部知っていて、それなのにわざとそのまま操られているんだ。シグマにも何か理由があるんだろって。本当なら僕が止めさせなきゃいけないんだけど、兄弟ってことを隠しているから言いにくくって。」
　ジンくんの肩にポンと右手を置いた。
「大丈夫よ、もうマインドコントロールなんて使わないわよ。桂木さんも、みんなも、きっと良い方に変わるわ。」
　今にも泣きそう･･･という感じで心配したけど、それでもさすが笑顔を最後まで崩さなかった。
「でも、兄弟だってのはジンくんから言ってやったほうがいいわよ。あの人、絶対に自分の口からはそういうことを言い出さない人だから。」
「だから、だからこそ、本当は兄貴の口から言って欲しいんです。･･･なぁんてね。」
　ひょいと首をすくめておどけてみせる。
　その仕草がなんとなく桂木さんが時々見せる仕草によく似ている。それだけでジンくんと桂木さんが兄弟だっていうのがなんとなく信じられた。他にも話したいことはあったけど、今は何も言わないでおこうと思う。
　ジンくんは工具箱を軽々と持ち上げると、両手で頭の後ろに回して立ち上がった。
「ねっ、もしかしてジンくんだったらラオコーンに会えるなんて可能？」
　格納庫から出て行こうとするジンくんを追って、あたしも立ち上がった。肩を並べてみると、ジンくんってあたしとほとんど身長が変わらないんだわ。
「僕としてはレイコさんにそこまでやって欲しくないんですけどね。」
「じゃあ、やっぱり会えるのね。」
「方法がない訳じゃないっていうだけです。僕の能力じゃ駄目ですけどね。」
「ジンくんで駄目なら、あたしじゃ余計に駄目じゃない。」
「レイコさんは能力の使い方を知らないだけですよ。」
　ジンくん、いきなり立ち止まって、ジーッとあたしの顔を凝視する。
「この辺で新しい風を起こしてみるのも面白いかもしれませんね。」
　今度は悪戯っぽく笑って見せる。
「いつも兄貴ばっかりだから。」
　ふーん、あたしの方向音痴もたまには役に立つんだ。

　ジンくんの笑顔と、桂木さんの難しい表情、瞳の中で少しの間だぶって見えた。あたしはそれを振り切るように正面を睨みつける。彼らの問題には、あたしが手出しする理由がない。あたしが本当に今やらなきゃいけないのはラオコーンに会うこと。
「今度こそ全部を話してもらうわよ。」
　わざと言葉にして自分に言い聞かせた。
「え？」
「ジンくん、行くわよ。」
　新しい風を起こすために･･･。

ＡＣＴⅥ　「MEMORIES」

S60.22.JUN <<H20.3.JAN>>